

主幹・麻生路郎

川柳新誌

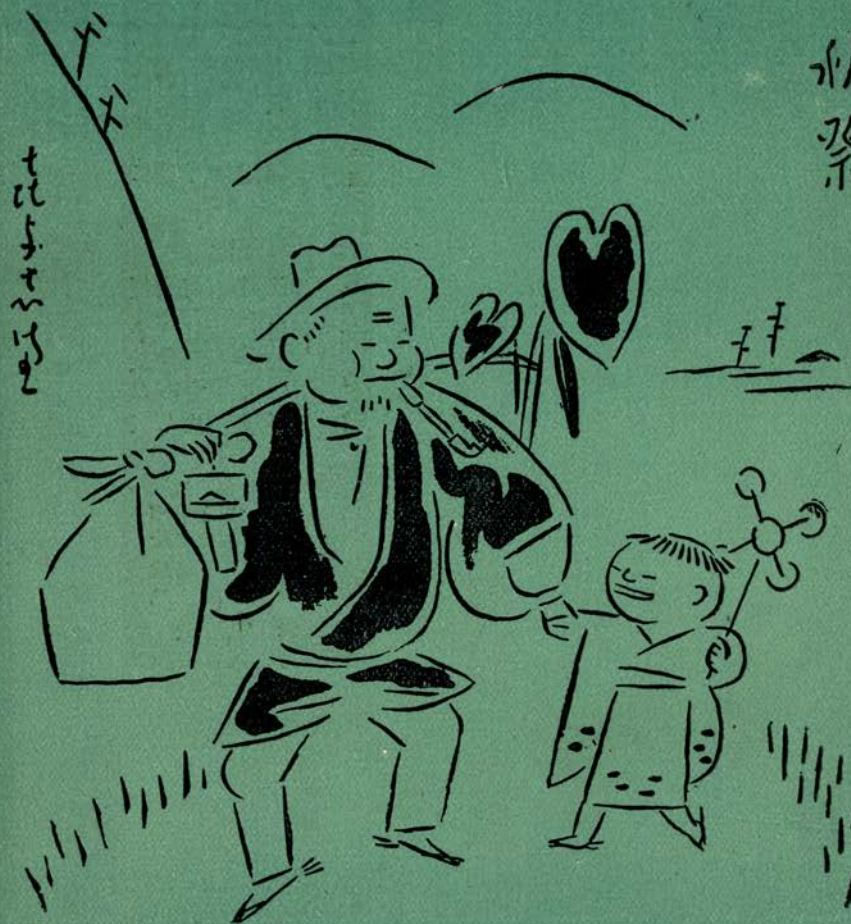
十月號

大正十三年三月三日（第三回）創刊
昭和四年十月一日發行（每月一回一日發行）

川柳雜誌 第六卷 第十號

川柳雜誌社發行

秋祭



十月例會

日時 十月五日(土曜)午後六時半
場所 南區清水町電停西入北側
端の坊

兼題「指」三句
會費 三十錢

初心者の來會を大に歡迎す

「週刊朝日」

懸賞 文藝大募集

川柳「逃げ腰」

選者麻生路郎氏「用紙官製ハガキ一枚一句に限る。ハガキの裏面には必ず住所氏名を明瞭に御書き下さい」▲應募原稿には「川柳」を明示せられたし▲大阪中央郵便局私書函五〇番大阪朝日新聞社内週刊朝日懸賞文藝係宛▲秀逸三名に賞金 佳作五十名には記念品として紙紙又は短冊を贈呈▲締切十月十日限▲入選作品は十月二十七日日より逐次發表

各地支部増設

本社は川柳の社會化を實現させるため全國各府縣に支部を増設いたします。柳壇のため且又「川柳雜誌」のため眞面目に支部幹事を引受け極力「川柳雜誌」の擴張運動を援助してやらうといふ川柳家は本社宣傳部へ支部設置希望の旨を申込まれたい。

川柳雜誌 第六卷第十號 目次

感想・評論

藤柳の 柳翁忌偶感
阿部閑生 蛭子省二
安井ひろし

研究・其他

錯覺 研究・其他
川上三太郎 前田雀郎
吉田 紋路太郎
漫畫 柳飴細工

月評 (前號)

川柳類題索引(九)
BUILDING
松元町紋太 福田山雨樓
高橋かほる 出田日雨
石村見天 横山新水
朝田勝二 上田柳影
蛭井省二 楊山公南
丸山 篠原春雨
橋本二柳子選

電車 (其三)
黄吻錄 横着
見たま 川柳から見た現代風景
川柳のこりやく

霧 阿ノ娘
女 靈柩車
ハイエストルーム
クロームの指輪

胸算 稻妻 一路集 (募集句)

欠伸

柳珍堂忌 飛燕往來
杭全町MEMO 編輯後記
秋字 (榮表紙)

創作

川近 柳塔作 出松丘 高橋かほる 出田日雨
川松盛 川合盛 川合盛 川合盛
石川 雙葉 石川 雙葉
近藤テ 藤澤たけ 若井たけ 若井たけ
島田 田田 池田 田田
々々 々々 川村 田田
福田 柳山 福田 柳山
作柳 柳山 作柳 柳山

近作

麻生路郎 朝田新洲水 淺井冷々 伊藤愚陀 伊藤愚陀
橋本二柳 楊西見光二 西安市公三 生田市公三
前田五健 佐々木三 諸々 諸々

住田亂耽共選 楊井二柳子記 橋本二柳子記



近作

麻生路郎

秋さらり銀の襖のものおもひ

○

考があつてのこまじかろくうけ

○

二階から降りる音さへマルキスト

○

使ひきれない後家の収入



蟋蟀入牀語

——榴花洞漫筆——

前田 雀 郎

女房は里のお袋の看病に歸り、久し、留守をしてゐるので、近頃の私は昔にかへり、部屋一ぱいに寝そべつてゐる。雜誌の拾ひ讀みにも飽きて、枕から首を擡げるに、庭先から降るやうに、蟀の聲が聞こえて来る。氣をつけるに、枕の下にも、壁の裏にも、チミと啼くその聲がある。

蟀も来る獨り寝の床の上

私は自分にさういふ舊作のあつたことを思ひ出して、久しぶりでこの蟲の啼く音を懐かしんだ。

私の生家の地方では、この蟲の啼く音を「裾取つて肩襷け」ミ聞く、東京では「裾させ肩させ」ミ聞いている。田舎の人に較べるに、東京の人のそれは、少しせつから過ぎるが、成程さう聞けばさうも聞こえる。この蟲が自分の啼く音を主張せず、さういふ人々のいろ／＼な感情を乗せて、自分は單に伴奏者として済ましてゐるところは面白い。

蟀は物思へミて啼き止むや

これも私の舊作の一つであるが、まつたくこの蟲に急にパツ

タリ啼き止まれるに、何か氣持の上に空虚なものが生じて来る。それはこの蟲の啼く音は、私共の感情を支配してゐる。これは他の蟲に於いては見られないことで、鈴虫や松虫が如何に美しい聲でも、さういふ風に深く人の心の中心の中へ働きかけては來ない。何所か他人らしいことがあつて、蟀のやうに『うちのもの』ミいふ感じがしない。

かういふ風に、私共の生活に深く入り込んでゐるこの蟀が、なぜ川柳に今まであまり詠まれてゐないのだらうかは、私年來の疑ひであつたが、先頃つれ／＼のまゝに『武玉川』の全巻を再讀するに及んで、始めてその事が氷解したのである。今日まで氣がつかずにゐて誠に聴かしい話であるが、實は紀逸の有名な

二夜鳴く一夜は寒しきり／＼す

こいふ句をはじめ、この蟀は『きり／＼す』の名に於いて、既に古人に幾多の詩材を提供してゐたのである。

紀逸はこの『きり／＼す』の句に依つて賣り出したと云つて

もういふ位この句は有名なもので、紀逸の『夜寒むの句』として傳へられ、今日尙その句碑は小石川の芭蕉庵に當時のまゝ残されてゐる程である。従つてこれは紀逸にまつても餘程自慢の句



であつたらしく、その見徳を喜んでゐないだらうか、それから紀逸は大分きりくす好きになつて、竟には『蟋蟀入牀語』さいふ印まで作り、これを最高の廿五點の點式に使つてゐる。

紀逸の好みがかういふ風であつたから、上の好むところ下これより甚しきはなしでもいふのか、『武玉川』を繙くに實に夥しい『きりくす』の句が眼に飛びついて来る。ザツミ見渡しても、十五編までに紀逸の句を加へて約十九句、二代目紀逸はこの方でも先代の衣鉢を繼ぐつもりか、一層輪に輪をかけて、十六編から十八編までに約十五句を選んでゐる。

私はこれらの句を、最初は『きりくす』を所謂きりくす

として讀んで行つた。さうして十編に至つて前述の『蟋蟀入牀語』さいふ點印を發見し、そこに描かれた蟲の姿の、今日云ふ蟋であるのを見て、始めてオヤミ思ふたのである。私はいぶかりながら、もう一度それらの句を讀みかへした。そして成程これは『こほろぎ』を詠んだものだミ氣がついた。御參考にこれらの句を、紀逸撰のものだけこゝに書き抜いて見るこ

掌を死に所にするきりくす

(初編)

死際は人形に似てきりくす

(同)

二夜啼一夜はさむしきりくす

(二編)

元船も尻から見ればきりくす

(五編)

きりくす都の土ミなりにけり

(六編)

妾ミは火をする中のきりくす

(七編)

きりくす籠で死ぬ氣で鳴あかし

(八編)

無念さは冷めたい小袖きりくす

(九編)

後添の焚つけてゐるきりくす

(同)

くつわ虫きりくす程派がきかず

(同)

女房は足をいやがるきりくす

(十編)

きりくすない分別を鳴いてゐる

(同)

薄霜は毒にもならずきりくす

(十二)

子が飼つて親が寢覺のきりくす

(同)

きりくす背中の上の膝がしら

(同)

身代しんたいを足あしから崩くづすきりぐす
(十二)

懸金は風の道なるきりぐす
(十四)

きりぐさ鳴かぬ捨子やその昔
(同)

若黨にこりたてられてきりぐす
(十五)

目についただけで右の通りである。この中二編の句は十五編
 の句は紀逸の作であるが。さてかうして並べて再度つづさに味
 はつて行くに、こゝにまた一つの疑問が起つて来る。されども
 れも『こほろぎ』だと言へば、蟬にも聞けるが、右の中初編の
 『死際は』の句、五編、六編、八編、九編の『くつわ虫』の句、
 十編の兩句、十一編の『子が飼つて』及び『膝がしら』の句、
 十二編の句なきは、今云ふ『きりくす』の句だとも云へないの
 事はない。

かうなるに、一體さつちが『きりくす』なのか、當時實歴の頃は、今云ふ『きりくす』の事をきりくす云ひ、今云ふ『こほろぎ』の事をきりくすと呼んでゐたのか、サア判らない事になつて仕舞つた。そこで何時から何時の頃まで、この兩者を混同して呼んでゐたかを知り度いと思つて廣辭林をさがして見るに、

きりくすー形かたちはいなごにに似る。こほろぎこほろぎの古稱こせう。各蠅いんたあり

こほろぎー全體褐色にして云々。うんくきりぐすの古稱。こせう蟋蟀。きりぐすと

36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525
 526
 527
 528
 529
 530
 531
 532
 533
 534
 535
 536
 537
 538
 539
 540
 541
 542
 543
 544
 545
 546
 547
 548
 549
 550
 551
 552
 553
 554
 555

こゝまで乗^のりかかつて、判^わらないから云^いつて、このまゝ諦^{あきら}めて仕^し舞^まふのは如何^{いか}にも業^ご腹^{はら}なごきなので、それではこの寶曆^{はくりき}の前^{まへ}にはごう呼^よんでゐるたか、それを一つ探^{さぐ}つてみようご考^{かん}へ、元祿^{げんろく}頃の俳書^{はいしょ}を引張^ひり出^だして調^{しら}べるに、其角^{きかく}の『五元集^{ごげんしゅう}』の中^{なか}に、彼^{かれ}の

猫にくはれしを鯉の妻はすたくらん
さいふこぼろぎが出てゐる。鯉は「こぼろぎ」さいふ文字である。
さてはこの頃から「こぼろぎ」さいふ言葉があるのかと興味が
出て來たので、尙も探つて行く。同じく彼の「虐栗」の中に
この句が

猫にくはれしを養の妻はすたくらん
 こ虫の一字が違つて乗つてゐる。 蜚は、きりくゝす』こいふ
 文字である。かうなるに『きりくゝす』か『こほろぎ』かます
 く判らなくなつて仕舞ふ。ではその頃の俳人は『きりくゝす』
 こいふものをきういふ風に詠んでゐたか、先づそれから尋ねて
 見當をつけて行かうと思つて、更に勇氣を出して探つて見るに
 あつた、あつた。嵐雪の句の中に『芹の湯に地獄めぐりこいふ
 事有此邊の濕化蟲皆黒し』こいふ前書きで

己さへ餓鬼がきに似たるよきりぐすいふのが見みつかつた。『

皆黒し』これで『こほろぎ』を『きりくす』と呼んでゐる事が釋然として来る。それではその以前はさういふ事になつてゐたか、今手許に参考すべき書物が無いので、俄に斷ずる事は危険だが、既に『百人一首』の中に人口に膾炙した『きりくす』鳴くや霜夜のさむしるに』云々の歌があり、遡つては『古今集』の俳諧歌の中に、業平の

秋風にはころびぬらしぶぢ袴

つゝりさせてふきりくす鳴く

こいふ歌が見ゆ、また『百人一首』の撰者定家卿の孫の、曉月坊といふ鎌倉時代の歌人のたはぶれ歌『酒百首』の中に

盃はめぐりて行くをきりくす

誰にさせきて鳴明すらむ

こいふのがあるころを見るに、『こほろぎ』を『きりくす』と呼んでゐる事は随分古くからしく考へられるが、その先きには判らない。

これでまアさうやら『こほろぎの古稱』こいふ方面はかたがついたが、では今云ふ『きりくす』は何時の頃から『きりくす』と呼ばれるやうになつたか、またこの方が残つてゐる今度はこの問題について探りを入れて行かなければならない。前にも云つたやうに、この兩者の全く混同して使はれてゐるのは寶暦時代である。従つて今云ふ『きりくす』を探索するにすれば、こゝから始めるのが順序のやうに思はれる。そこでまた『河玉川』を引つ張り出す。

前掲初代紀逸の撰句の中にも、今云ふ『きりくす』らしい姿のものが尠くなかつたが、二代目紀逸撰の十六編から十八編までの句を見るに、いよくそれがハッキリして来る。その中からそれらしいものゝみをこゝに抜いてみるに

きりくす後一聲のりちぎ也 (十八)

夜がふけて使へば舌もきりくす (同)

片足になつて秋立つきりくす (同)

こいふやうに、だんく輪廓が整つて来る。しかもそれが編数が後になる程多いのは面白い。『河玉川』十八編は安永五年に刊行されたものである。初代紀逸の最後の撰になる十五編が出てから十五年後の事であるから、それだけ今日に時代が近くなつてゐる。

さてこゝまで調べがついて来るに、今度は『柳多留』の句が問題である。『きりくす』の正體はいよくこれで決するものである、イチカバチカ、川柳を採すに、寶暦代の中から

草市にうろたへて鳴くきりくす
草の庵蠅取もちにきりくす

の二句が出て来た。しかしこれではまだ明確に姿を見せてゐないつゞいて明和代のものを採すに

押へればせ放せばきりくす
面ざしは馬に似てゐるきりくす

ふん張るさ籠一杯のきりくす
草刈の子へのみやけはきりくす

こいふのがある。大分有望になつて来た。殊に右の中『面ざしは』の句や『ふん張る』の句は、今云ふ『きりくす』の姿を活寫して間然するところがない。如何に天下廣しと雖も、面ざし馬に似た蚌、こいふものはあるまい。もう安心である。漸くこゝへ来て本當の『きりくす』をつかまへる事が出来た。しかし念の爲めだから、ついでにもう少し調査をすゝめて見る文化代のものに

合の手に舌打をするきりくす

こいふのがある。次の文政代のものにはきりくす背中、時に時をよつてゐる

こいふのがある。こゝに至れば最早全然疑ふ餘地はない。『きりくす』はつひに今日の『きりくす』なのである。

では『こほろぎ』の方はどうなつたか、きりくすに『きりくす』の名を取上げられると同時に消れて仕舞ひでもしたかイヤ、その心配は無用である。

虫の中でも、こほろぎは工面者 (天明)

こほろけに氣をつけれれる手ぶつちよう (文化)

こほろぎは虫の中でも世帯じみ (文政)

こいふやうに、チャンこ『こほろぎ』はこほろぎとして句の中に生きてゐる。

これを要するに、蚌は、古くは『きりくす』と呼ばれ、『こほろぎ』こいふ俗語が出来ても、右の『きりくす』こい

ふ古稱が歌言葉として残されてゐた爲めに、併用されて徳川期に及び、こゝで平民文學の初興から、詩歌の上にきんく俗語が入り込んで来たので、つひに歌語として残されてゐた『きりくす』なる名は忘れられ、その俗語の『こほろぎ』になつて今日に至つたのだらう。蚌は他に『いさゝ』こいふ稱もあるこれも古いものらしく元祿頃の俳人に大分使はれてゐる。一方今日のきりくすの方はこいふと、例證する句を今得ないのは残念だが、その啼き音から取つて、古くは『ぎす』こいふ名で呼ばれてゐたものとやうである。後に蚌から『きりくす』の名を奪つたのも、さういふ啼く音の連想からだらう。

獨り寝のつれくから、床の上に腹這ひになつて始めた蚌の身語調査も、これでさうやら落つたやうである。或ひは云ふ事が獨斷過ぎて、國文學者あたりから嗤はれるかも知れないけれど、川柳さういふ限られた範圍の中で、何の用意もなく始めたのだから仕方がない。それにしてもそれらの變遷の年代がハツキリしないのは物足りないが、これは大方の御示教を待つ事ししやう。

蚌 一匹を探すのに、大分手間暇をこつて仕舞つたが、かう書き終へて見るに、何か齒にはさまつてゐたものを、せゝり取つた後のやうな氣安さがある。ドレ寝るこしやうか。雨に降りこめられて縁の下へ逃げ込んだ蚌は、こんな人に骨を折らせたのも知らずに、さつきからせつせき啼いてゐる。



川柳塔

松丘町二

○ 富豪窟傲然として樹が聳ね
寝ころべば机の裏を蟲が這ひ
逃けるすべ知らぬ螺螄の煮られたる
履歴書や氣を取り直し墨を磨る
食ふために追従笑が出かゝるよ

朝田新水

○ 棒押は女の手前負けられず
朝漬は隣に負けぬ色を出し
孝行がしたさに妻の母を呼び
一品を賣るに二人もかゝつてゐる

正月を待つてゐるのも妾の子
たゞ處女みだけは知つてゐふきりようさ
貧相な顔が子にまで傳はつて

○ 出口雨町

抽斗にキネマニウスが溜るのみ
落籍されて國から遠いここに住み
用のない眼で警察を見て通り
肉塊が蝶々のやうにさぶレビユー
氣違ひのかくまで下駄をはきつづし
若き日の母をしのぶも簞笥から
反對をされつゝ息子犬を飼ひ

講談師芝居ミ少し筋をかへ
起きくゝのなりで茄子の虫を除き
そう吐るものではないミ猪口を置き
色々の注意を選手輕う受け
ホツチキス買うた當座の無駄使ひ
ライスカレー残さず食べてあなざられ
中程で鯛はまがつて威勢見せ
別室に手の鳴るを待つ女中ゐる
奈良へ來て心の張がふみゆるみ
食ひこんでゐることも知る貯金帳
帶解けば買ふでなかつたパスが落ち

○ 中島 鐵 洲

影だけは吾も巨人の如くあり
此の愛を嫉妬だ等ききづつける
父の行衛を今日も指し

○ 高橋 かほる

おちよやんはあつちを向いて錢を出し
寫眞屋を何か氣になる儘に出て
逢戻りあしたは丁度遅出なり
圓タクに年増は御苦勞はん云ひ

○ 淺井 冷々子
水かへぬ金魚にももう飽の來し

恙なく避暑の手荷物皆戻り
永湯治郷里に似通ふ記事を見る

○ 松 盛 琴 人

動物園にて (七句)

見物へ氣短さうに虎歩き
駱駝もう養老院のやう暮らし
齒を剥いて猿結婚を申込み
掠奪へ子猿の方も油斷せず
住友の鶴落ちぶれたなと思ひ
ツエ伯號納めたやうに象の尻
水鳥は餌の出るラツパ知つてゐる
四十貫仲仕の目にはわけはなし
貧しくも生れた夢の賑やかさ
村長の白扇何か書いてあり

鼠島隔離所々感 (五句)

傳染の怖さも忘れ子を抱き
愛は強し傳染病も何んのその
笑ふ事忘れたやうにみんなるる
病む人の皆善人に見ゆるなり
退院のあこふりむかず鼠島
○ 伊藤 愚 陀
ごはんから松葉が出るもテント村

戀人のこころなき思ふ星明り
惚れた惚れたは酔ふて居るなり
怒らないこころを父親つけこまれ

○ 川合舟々

この儘に他人となるを願ふのみ
頃合だなきも考へてもくれず
投げかけたあしも毒婦になりそこね
俺れにかこ思や言づけして呉れろ

○ 伊藤緑之助

臺灣の冬木立君へ

老ひましゝ父さ基をうつ夢もあろ

長病の喋朗兄へ (二句)

七月さ八月稻佐は待つてゐた
もろこしの一つ残つて風があり

長男を失ひし人へ (二句)

そりやみんな因縁だこは近所なり
老の身の酒手になればいゝこいふ
應接の百圓紙幣に微風がある

○ 酒井駒人

父の無い子さ鈴虫を取りに行き
盲目の父夕焼の方を向き
たまに來た友に女の連れがあり

頼まれもせぬに貸間を聞いてやり

○ 水谷鮎美

わが膝に寡婦つゝましく手を重ね
埃かこみれば三十のにきびなり
足あさの凹みに蟻は重傷だ

○ 石川双葉子

電燈を消せば身にしむ秋の夜
呑み連れさ一升壺を轉けてる
名譽慾何んほでも出す金があり
このごろの相場にカルモチンが要り
こんご來た隣に琴が二つあり
下車口の圓タコ蠅の如くなり

○ 橋本二柳子

鐵棒のつめたさ夏を忘れられ
度膽抜かれて大阪驛の前に立ち
辨當のぬくみ女の心なり
右の手をあけただけでおじぎが出来る
庭掃きに聞けば旦那はゐるらしい
うたがはしい氣持で紙幣に折目つけ

○ 近藤テルホ

お通夜の中にみだら心の俺れもゐる
弔詞よむ借着姿に泣かされて

世間がこわくてブラトニツクラブ
夜蜘蛛ころしてきりなほすトランプ
洒落はわからず花火は消へおちて

◇ 楊井 二 南

色街を抜ける學生猛々し
金の要る話に髪を梳くばかり
奉公に行く人力車眠うなり
友達が有り過ぎて母困るなり
三味線を弾けば食へると思ふて居
比較にもならぬ話に念を入れ

◇ 中澤 濁 水

チト飽いたサイダー透かし〜飲み
氣に入つた仲居の行衛訊いて飲み
遠雷の腹を壊した音で晴れ
案の定假り縫ひの服引つしぱり
兒を避けた自轉車は荷も引つ冠ぶり
雑巾を上級生がみんな取り

◇ 中見 光 路

らつば呑み片手は宙に忘れられ
すねかへて食卓斜におちつきぬ
親切に狎れてそうするものさされ
境界をつけてねた子の足ミ足

梯子だん子は落ちたかと思ふ音
下駄ぬれて裾ぬれて妻疲れきり

◇ 若井 たけし

西瓜なんかに喜ばぬ兄
涼を得んきて溺死してゐる
麥藁帽にさへ階級を見せてゐる
秋風に轉がつてゐる落し紙
寝轉んだ息子へ同じ屏風の字

◇ 安西 杏 三

黒枠に驚かされて丸く寝る
着換へても子供めんこを離さない
勝つ事にのみ因はれし一日
出勤に淀川のん〜流れてる

◇ 嶋田 翠 峯

冬帽になるこ三つは老けて見へ
パラピンの細工に今日の恐ろしく

◇ 西村 市 公

坂道へかゝつた事を馬も知り
園本は火鉢の上でそり返り

◇ 和田 源 坊

ツエ伯號しかも戦敗國で出来
もうけ咄しは道徳に觸れ

◇ 生田 翠夢

若き日へ疲れてる妓の細りやう
靈魂を論じる程に淋しうて

◇ 池田 雪峰

線ひけさ心のやうにまがつて來

歸國

暑くないか寒くないか親は聞き

粒々集

東京 川村 花菱

立關から來る丑の日の出前持

氷屋に忽然として娘居る

白熱の路を馬力がミッろかせ

生き代り死に代り校友會費來る

水飲み切つた唇のしづく美しき

立秋の桶にこほれる水の音

炎天にトタンを盗まれたはなし

失業者テニスを見てる 紹介所

ツエ伯驍來る

母親は地球の事も知らず死に

乞食の兒いさ手のこんだ海水着

紹介の結果のはなしゆすりめき

さんがらしに似て紅い花 秋の花

松山 前田 五健

就職難世の忙はしきを見るばかり

復習へ折柄ラデオ浪花節

君ントコモか僕ントコモ漏る

妬む眼ミ知つて其れから面白し

上服の下何んにもない給仕

大阪 福田 山雨樓

機關車へこそわりもなくつながらる

西へ行く汽車の姿のさりけなく

ほゝ笑める情婦の頬のゆたかなる

迫る時刻へ鉛筆が折れ

山火事の消ゆるが如しのほる 霧

煉瓦よお前はよくこらへたものだ

秋來ぬミ糸瓜の花やたら散り

シグナルの鋭く降りて夕陽する

子供級長となりて

宵をねかする頭まんまるし

大連 佐々木 三福

兵隊がうたふほんこの軍歌

善人の顔が並んだ三等車だ

日向葵のノツボのく秋澄めり



籐椅子

「川柳漫談」を讀む

阿部 閑生

銷夏せうかの雜讀ざつどく、漱石そうせきの二百十日ふたひゃくにじふにち、道草みちくさ、三四郎さんじやうろう讀んで了つて、次つぎに何を讀まうかと思つてゐる矢先に、大丸書齋部だいまるしやうさくぶの新刊しんぱんの中に、麻生路郎著あさひろぢやう『川柳漫談』を見出した。

早速、六階ろくかいの休憩所きゆうけいしよで『臍へその緒お』から讀み初め。目次めきの第一だいいちがお臍へその話はなしである事が非常ひじょうにおもしろい。私は子供の時に一人小山の頂たけきに立つて、圓い蒼穹そうきやうの真中まんなかに天の臍へそを見附けたいものだ、懶まくなるまで首を仰あがけて居たことがある。こゝにはお臍へそのないお腹を想像さうぞうするこんなだがお化はのやうな感じがするさ書いてある。成程なるほど白しろい圓まるい生きたあからさまな

ものを想像さうぞうするこ、お化は以上の不氣味ふきみさである。
ラジオは、時に恰さも開始かいしされた市岡中學と鹿兒島商業との野球試合を報じてゐる。市岡がリードして優勢を示してゐる。應援の喊聲かんせいが耳朶みみの中へ崩れこむ。

○ 盲人まうじんの微草きそう、蛙かえる讀み進んでその次つぎが夫婦喧嘩ふうふけんかの解剖かいぶである。普通一般のや少し色彩を異にしたのや、頗る近代的のや、悉く側近そくじんの實例につき、その哲學的考察ていしきこうさくと情緒的解剖じゆうじきかいぶによつて夫婦喧嘩の微細な構成分子の種類を示されてゐる。喧嘩をしないうちは眞に味ひのある夫婦ではない泣菫なきすみがいつた。こゝには夫程に禮讃らいさんしてないかはりに、他人のを例に擧げた責任の埋め合せの意味で、御自身のたつた一

度の經驗談をぶちまけて、惜しげもなく披露されてゐる。話の本筋に入る前文中に
呑んで欲しやめても欲しい酒をつぎ
さいふ舌の上にしばらく含んでゐたいやうな和合わがひの模範句が一つ、云ひ知れぬ光りを放つてゐる。

○ これは面白おもしろいぞと無闇にふわついて来た心こころが、急に引き緊つて、痛い程に堅くなつて了つた。君も僕も死ぬ話のなかに夜が更けて來るゝ實際に死んだ子が、いつの間にか自分の机の前まへに來て坐つてゐる。こんな時に私は詩が生れる。書きいて、目の當り亡き愛兒に話し掛けてゐる様ような、活字の中に息の通つてゐる川柳が七句並んでゐる。これも眼へ映らずに胸へ刺さつて來る傷い句ばかりである、暗然あんぜんと眼を瞑ぶる。

○ しらじらしき悔くやみの泣なみます
さいふ一句があつて、世の常の悔くやみさいふものに反感をもつたさいふ一節がある

私もかつて、私に盲目的全愛であつた母が病氣で亡くなられた當座『いや、お蔭で母はよくなりましたよ』『ミ突飛な挨拶をして、聞くに堪ぬ煩はしさから、この淀みなき悔みを封じ去つた事があつた。』

○
近眼の微苦笑、にある著者が實驗の逸話めくユーモラスに浸りながら、ずつと以前に讀んだ、自分の近眼であることに氣付いて居なかつた泉斜江が、何かの機會に始めて近眼鏡をかけて「世の中つてやつははつきりしたものだね」と跳び上つたといふ話を思ひ出してふと面を上げるさ、市岡は鹿兒島に大きなスゴアで勝つて了つて、ラジョア耳を差し出してゐた連中がいつの間に居ない。讀み目に指を挟んだまゝあはて、尻を上げる。

○
電車の中だけで硬軟平均して年に一萬二千頁は讀める、ミ被仰る著者に對してお恥しい至りだが、私は毎日の電車や自動車の中では字が躍るから本を讀まない事にしてゐる。夕食後直ぐに續きを續く道草や三四郎は、何回目だか判らぬ程だからはつきり／＼讀む。川柳漫談は初めて半ば

讀み進んだ興味に、先きを急きたる。

○
近眼のくせに役者の顔の肉がびく／＼動くところ迄見ないミ不愉快で連も芝居を見て居る氣がしないといふ舊敏な觀察ミ、多種多様な趣味のなかゝら、精撰された豊富な材料が、川柳的な簡明な筆で齒切りのよい字句が次から次へ展開する。

唇を綻ばしたり、引き緊めたり、時には本から眼を離して『おい、こんな事が書いてあるよ』ミ家族の者にその二三行を讀んで聞かしたり、自分の頭腦の中をこつそり覗かれたのぢやないかと思はれる、特異な共通性に陶醉したりして居るミ、子供が横合から、まだあかぬかいふ顔付きで窺きに来る。大きな火取蟲が一つ頭の上でうなりながら旋廻してゐる。

○
最後に、一昔前の大阪見物、がある。

掠十の上方見物ミは全く筆趣を異にしてゐる。膝栗毛はおもしろいが、特に面白がらせられる節が大部分ある、掠十のにも少しはある。この大阪見物は面白く讀ませやう／＼書いたのではなく、自然に書いたのが讀んで面白いのだといふ所へ氣がつく。狂歌の膝栗毛に比べて川柳描寫の本領がこゝにあるのだなうなづかれた大阪辯の會話を文章に織りこむのは至難のわざであつて、下手にゆく／＼地の文まで破壊を來すものミ忌避してゐた心が大阪の特色の有りを、なだらかに浮び出させた、そしてミこが巧いのかわらない會話の進行に我れ知らず愉快なほゝ／＼をこぼした。

○
その夜珍らしく、鼠がものを囁る音に目が覺めた。「引越を大工左官に手傳はれ」てやつと今年の一月から入つた許りの家に鼠に囁じられては大變ださ／＼起きて見るさやめる寝る／＼囁り初める、すぐに根負けして眠つて了ふ、夜が明けてから見たと縁側の突き當り一坪の板の間に冬の障子を外し重れた、その

(五十三頁へ續く)

川柳漫畫
工 細 飴

清 田 吉



飴細工見本も
賣れる事になり

卯生



相談の眞つ最中を妻が呼び 冷々子



ばら／＼の寝ざう
へ父が戻つて來

京郎



貰ひ風呂いらぬ
遠慮をしてあが
り
柳月坊

見るからに少年棋客
こましくくれ 時雨郎



上着脱ぎ又チヨツキ脱
ぎ鳥の聲 敏郎



満月やわれに漢詩の
素養なし 雨町



お寺への近道行け
ば蛇に逢ひ 青帆



月

評 (前號)

路 郎 紋 太

雨 樓 ひろし

山

近作柳樓 山雨樓提出

水やれば茄子こちをむくてか

石 竹

山雨樓……平凡な事を咏つてあるやうで、なほ捨て難い趣きをもつたとして居る。作者の自然に對する忠實な心持も、かゞはれて清々しい氣分のうちに素朴な野趣を傳へて居る。こゝなつて來ると俳句を選ぶところがないやうにも思はれるが、この句の様に囚はれない叙法に接して見ると、その雅拙の中に限りなき愛着を覺えないわけには行かない。川柳はこのところから深く、進んで行き度いものだと思ふ。

ひろし……茄子畑に水をやる 氣持が充分に出て居ると思ふ。殊に茄子がこちらをむくと云ふ表現は、石竹氏らしい見方であり、氣持になる。下五の「てか」と云ふのが川柳的ユニモアを含んで居るのであらうが、私は蛇足の様に思へる。むしろ「てか」と光る茄子の有様を句の外に連想せしめる手法を取り度く思ふ。勿論佳句である。

山雨樓……僕が此の句から出發して更に深さを求めた事は、作者の作つたものの句作態度に望むところであつて此の句としてはこれで咏み盡されて居ると思ふ。

紋太……「茄子こちを向く」は作者が茄子がこちらを向いた様に感じたのであらう、「てか」とは蛇足とまで言へなくとも多少考へ直し度い點がある。とにかく川柳がどこにでもころがって居るさ云ふことを思はせられる。

ひろし……「てか」とによつて夕日の畑を思はせるが、どうもしつくり來ない。

路郎……作者の心持もよくわかるし、野趣のある句として佳句である事には間違ひがないが、この作者の句としては、感激の薄弱さと思はせられるから未だにと云ふ感じがどこかにひそんで居る。

ひろし提出
明かし得ぬ事の素振も見てくれず 文 芳

ひろし……この句は戀の句であらうが私はこれをさうとらずに惱みを持つて居る。作者のうら淋しい氣持さ(曲解かも知れぬが)受取らしてほしい。さう取つてこの作者がさうした句風に進まれてゐる事を喜び度い。しかし句の調子があまりにすら／＼として居る事が缺點だと思ふ。

路郎……曲解ではないと思ふ。この句を戀の句として見る時には極く幼稚な句になつてしまふ。もつと複雑な境地を咏つたものでそこには云ひ度い事を意識して、かくして居なければならぬ惱みがあるのである。同時に多少の不満もあつて、やゝひがんだ様な心持も出て居るが、すら／＼と讀み下した時に字跡の上から心よい詩的情緒が流れて居ないので缺點さ云へば缺點であらう。

山雨樓……これでは單なる咏嘆でしかあり得ないやうに思ふ。もつと大膽に投げ出してほしい。川柳はあくまで鋭いメスを期待して居る。ものゝ觀方、心の感じ方みな鋭さを求めて居るのである。自分のあり丈の力でぶつと切る様な勢を出してほしい。つまり川柳は強く生きよと教へて居るのである。僕は此の句を戀の句と解して居る。

ひろし……戀の句と解される理由はさき程云つた句の調子の弱さから來るのである。しかし作者の書いて居る、文章(前々號参照)を

私は讀んで居るので惱みの句と取つたのである。作者の住まれて居る松山は主として寫生派の川柳の盛んな處であるが、最近こうした生活に即した自己表現の句に進まうとした過程途上の句を發見して喜んで居る次第である。勿論山雨樓氏の説かるゝ程度にまでレベルを高められん事を祈るものである。

紋太……僕の云ふ事がなくなつたが、あまりにすら〜と咏まれてあるので、僕の感興を起す點が見付からない。あまりに内容も淡泊すぎて奥がうかゞへない。文芳氏の文章を讀んで見ると氏自身もこの句では満足が出来ないであらうと思はせられる程簡単な句である。

路郎……簡単な句さ云ふのはどう言ふ意味か知らないが複雑な境地を咏まうとして失敗してゐるとも云はれるのか、單に此の句を簡単な句と言ふ事には同じ難い。

紋太……簡単な句と言ふのは、内容の複雑味を思はせないでたゞ入口に止つて居るたゞそれだけの事しか言ひ得て居ないと云ふ意味路郎提出

祖母の死へ二百許りの金が出る

雷相

紋太……僕はわからん。死へ云ふから、二百圓ばかりの香典が集つた事かと思つたが「金が出る」と言ふ事を重く見るさ死んだ後で濟くりでも出て來たのかと思へるし、もつと深刻な意味のある金が集つた事を句にしたのか、段々見て居るうちにわからんさ云

ふ事になつて來た。

山雨樓……僕は祖母の死によつて二百圓許りの金を費したと言ふ事實の前に頭を下げて作者の姿を思ひ浮べる事が出来る。祖母の死と言ふ順當な轉歸にあつたや、落付いた心持のあさへ二百と言ふまよつた入費が支出された事に無情を感じた句主の矛盾にユーモアを感じるものである。僕はさう言へ風に解したい。

ひろし……この句は次句の「あるひは俺も死なかも知れぬ」に關聯して居るものと思ふその意味で山雨樓氏の解説が當を得たものと思ふ。

紋太……それでは僕の解し方はさつぱりなつてゐない。僕も山雨樓氏の解し方ではなくてはこの句が生きて來ないと思ふ。しかし素直にこの句の叙法のまゝで受取つた時には僕の様な事も言へると思ふがそれも間違つて居るだらうか「死へ」と言ふのさ「出る」と言ふのが未來をさした言葉でどうもあさから入費の事を言つたものさ取りにくいと思ふ。ひろし……句の叙法にあやまりがある爲に紋太氏の様に解される事が多分多いと思ふ。

「死へ」「死に」とすべきではなかつたかと思ふ。「出る」は現在の言葉で現に金が出た即ち要つたと解してよからう。

紋太……「死に」にする事は説明じみた句になる恐れがあるこの句に疑ひを持ちながらも、言葉の非難を超えた力強い淋しさをこの句から感じるのが可笑しいと思つてゐる。

路郎……句意は山雨樓氏の説明で充分言

盡せて居ると思ふがこの句を初めて讀んだ時には誰でも一寸、祖母が死んで其濟くりが出て來たと言ふやうに考へさされると思ふ、自分もそうした誤解をして居たが、しかしそれで叙法の點に少しく變な處がある。そこでその叙法の缺點を探して見た。先づ第一に氣付くのは「祖母の死へ」の「死へ」が「死に」でなくてはならない。もつと適切に言へば「祖母死んで」と言はなければならぬ様に思ふ假に祖母が死んでから蒲團の下からか、或は祖母の手文庫からそれだけの金が出たことを考へてその祖母の生前いかにもしつかり者であつた事を想像すれば想像の出來ぬ事もないが、そうした蒲團の下から出る金としては古句にも類句がある。最もその句は二三兩であつて、その死者のりんしよくを咏んだものではあるがやゝ同巧の句たるをまねがれない。金高から言つてはさうしても二百圓と言ふ金は葬式料と見る方が安當であらう第二にこの句意を誤解せしめるのは「金が出る」が發見されたと言ふ意味に直感しやすくて費用が出たさとは直感し得ない。

點にある。これは文字の驅使法の上の欠點でそれを完全に表現する爲には「出費る」と書いて出費の横に振假名の「で」を入れるより外に方法がないであらうと思ふ。さうすれば二百と言ふ金が葬式の費用に要つた事がはつきりして句意を誤解せしめなくて済むと思ふ。

ひろし……從來の川柳を作る無用意さで句を作る人たちは「金が出る」を常套的に「金

費り」とするのだがさうかたづけ ては句が
つまらないものになるのである。

川柳塔 路郎提出

喧嘩した斗りの夫婦涼みに出

素人

路郎……非常にあつさりさ夫婦間のいきさ
つを此句の中に盛り込んで居る 手際に敬服
する。古句に「仲直り元の女房の聲になり」と
いふのがあるが、それから一步さきへ出て居
る。獨身者の到底味めない句であると思ふ。

山雨樓……しかし前にあげられた 古句は穿
ちの點に於て實によくさらへて居るが、此句
であるさ、句意の必然性が疑はれないでもな
い、さ云ふのは仲直りをしたものだといふ見
解のもとに解すれば、(そうもとれない事は
ないが)簡単に經驗を示したものと云へる
けれ共とりやうによつては、別々にわだかま
りがとけないまゝに、群衆の中へうろついて
居る姿も浮かばぬでもない。むしろ簡単に思
ひあはして句の妥當性を強めて居るやうに
もされる。僕は前句の「淋しくて呑めばあし
たに殘る酒」といふ句にたまらなく、ひきつ
けられるので、此句もそう簡単に仲直りした
ものではないと解したい。

路郎……此句の叙法からみると 喧嘩といふ
ものが大きな問題となつて居ない。夫婦喧嘩
が情愛をこまやかにする 一つの遊戯の如く
あつかはれて居て、もう涼みに入る頃にはけ
ろりと忘れ、むしろある親しみさへ感ぜられ

るのである。句がすらすらと味まれて居る割
に、その内容に非常に深い味がある。ので古
句以上に興味をそゝられたのである。情景が
躍動して居る點がうれしい。

山雨樓……非難がましいやうだけれ共、路
郎氏の解されたやうな句意とみるならば、あ
まりにメソッド化された 川柳味が口につい
て句の價值を稀薄ならしめる怖れがあるや
うに思ふ。所謂それでは通俗味がちすぎた
やうにされるのである。だが僕が最前解した
やうな句意にとる事はこの表現では無理か
もしれない。

路郎……「喧嘩した斗りの」さといふ頃には、仲
直りをしたといふ意味がふくまれて居るや
うに思へるが、もしわだかまりを續けてたま
ゝであるとするれば「喧嘩したまゝで夫婦は涼
みに出」といふやうな叙法にならなければな
らない。此句はその點に於てごくあつさりさ
夫婦喧嘩をさり扱つて居る。山雨樓氏の云は
れたやうなまだ、わだかまりのこけなまゝで
夫婦が涼みに出たといふ意味の句がうまく
出来れば此句と獨立して面白い 句だとは思
ふが、此句の叙法でさう解釋することは少し
く穿鑿しすぎた感じがしない。

紋太……まことにさうりとした氣持でこの
句は出来て居る 古川柳情緒とても云ふので
あらう。僕にはよくわかる。何も云ふに及ば
ず、その夫婦の生活なり、心持がわかつて面
白い句だと思ふ。實をそのまゝ十七字にま
さめておつぱり出したやうな句で、後はどう
なさよし。さ云つたやうな、自分の感情を讀

者に強いて居ない嫌味のない 點が僕にむい
て居る。然し僕は「いまこんな事を思つた。こ
ういふ句は同國人が國訛り 丸出して話あつ
てそれでよく氣持が通じて 居るといふのと
同じやうに矛盾さか軽い皮肉さか愛する
國のやうに通じる句ではないだらうかと思ふ。
たゞ怖れるのはこれだけでなさまつて居れ
ない心地がするので即ち 山雨樓氏のお説を
頂門の一針として此句を面白いと思ふて居
る僕が頂いて置きたいと思ふ。

山雨樓……此句の句評さはなれた事ではあ
るが作者が、味はれた他の八つの句の種々相
は可成り廣汎な維多な人生をみせてくれて
居るので圓熟された素人氏の句作態度に敬
意を表するものである。

紋太提出

疑へど妻は聖者のそれに似て

文蝶

紋太……嚴格で重々しい句だと第一に思ふ。
讀み返して居るさ、その事實に對して同感が
起つて来る。然し、こゝした内容そのまゝ表現
した叙法の句は境地の違つた人には 同感が
起らないかもしれないと思ふ。

山雨樓……紋太氏の云はれた「内容そのまゝ
を表現した叙法」はトリックを好みちな川
柳家さしてもの足らなさを感ずるの が當然
かも知れぬが、こうした莊重な、つきつめた
心境では、そこまで技術をこらす余裕がもて
ない場合があらうと思ふ 眞劍な句といふの
他はない。

路郎……妻の無策の策には世慣れた夫も頭の上らぬ場合があるものである。この句などはさう云つた場合をつかんだものである。紋太……下五を充分に云ひ切つてない叙法が複雑な聯想を起させる。それが上品な感じであるのむいと思ふ。
「聖者のそれに似て」はあまりに

川柳書架(卅六)

川柳漫談

麻生路郎 著

△著者は川柳が社會からは誤解され、文壇では下積にされてゐるのを慨し、其の繩縛から解放されること、廣く社會に川柳を浸潤せしめ、ほんごの川柳を知つて貰ふため川柳の社會化運動に没頭したことを其の序文に述べてゐる。従つて本書もその目的を遂行する一つの手段として刊行されたのである。

△次に其の目次を列するに川柳漫談(臆の緒、盲人の徽章、蛙、夫婦喧嘩の解剖都會地獄、君も僕も死ぬ話、レディーメードの書置、戀を追ふ一人者、指切、鼠盗人、女の三十、賽銭、重役、フアーブ

妻を神聖視してゐると思へる。そうした偽りのない寧ろ尊くさへも思はれる。この立派な妻を「疑へど」と云ふ措き方はおかしくないかと思ふ。この「疑へど」は信じてゐると云ふことの反語ではないかと思ふ。
路郎……妻の態度が無邪氣であるために誰にでも馴れ／＼しくすることから、夫の疑ひ

ルの蕉の外交、幽霊の靴、近眼の微苦笑傘の行衛、猫の寫眞、愛の巢、保険屋に新聞屋、質趣味、床下の佛像、無口、附貸の犬、鼻の修業、なりさがり魂、校長さんご煙草、私の墓)川柳染ちがひ、一ト昔前の大坂見物。

△昭和四年八月一日發行。四六版三九一頁。定價一圓五十錢。大阪市東區備後町一丁目三番地弘文社發行。

△本書は川柳家は勿論、川柳家以外の人達も讀んでも面白い本である。既刊柳書中面白く讀ませる點に於て本書の右に出るものはない。それ程輕妙に、飄逸に、辛辣に書かれてある。一讀を薦む。

春雨句集

篠原春雨 著

△卷頭には阪井久良岐氏の序文がある。△例により跋文「私の句集が出版せらる

が出てゐるので此疑ひは人間の本能であるだけ決して有り得べからざることでない。「聖者のそれに似て」さ云ふ點から考へて肉感的と云ふよりも無邪氣さと云ふ方から出た態度に疑ひがかゝつてゐるやうに思ふ。この句から夫の愛情の濃やかさをうかゞふことも出来る。佳句の部に入れてよい(欣文筆記)

ゝに就て」から抜く。

(前略)處が本春に到り、拙吟約三千句に近いものを蒐集し、すっかり原稿にして示され、是非とも出版せよと突きつけられたのである。(中略)明治二十七年日清戰役時代から始まつて、昭和の今日まで、作り去り詠み來つたものを一句毎に再考自選してゆくに、會心の作さういふものは曉天の星はぎもないのである。然しながら頁數の豫定もあるさういふので、強ひてこれ文を拾ひあけた次第である(下略)

△昭和四年八月二十日發行。菊半截。一八〇頁。非賣品。甲府市橘町十八番地川柳山日吟社内春雨句集刊行會。

△著者は柳壇に超越して溫健一方で行く人、後進誘導に尤も力を努められつゝある人、従つてその句又溫健である。一讀をすゝむ。

近作柳樽

路郎

選

今一度を飲む俺のしたい身を沈め
酒を飲む俺の心を探者に知らず泣き
七當の心をいながら探者に知らず泣き
本輪の親の心を探者に知らず泣き
三命の骨の皮も乗へつて出るし
薄けの骨の皮も乗へつて出るし
ふけの骨の皮も乗へつて出るし
故郷へ見榮算段の毛寄せてみる
金の要る時榮算段の毛寄せてみる
性格を此處まで折れぬ来たものを
何處まで底まで知れぬ貧に居る
似ないで歸つたい偏屈な男の子
外に出るかから歸つたい偏屈な男の子
子供等物乞帽子子にかなぶせ
短夜の隠居物乞帽子子にかなぶせ
寄附金の氣張屋かあつさり斷られ
山裾に點字のやうに灯がこもる

鞍馬 同 同 同 桑 同 同 別 同 同 大 同 同 鳥 同 同 同
山 港 府 阪 取

草 同 同 同 同 敏 同 同 兄 同 同 黒 同 同 同 同 同 同
明 郎 卓 子 天 松

濱寺海水浴場所見 (二句)

神 同 大 同 松 同 大 同 同 金 同 同 神 同 同 金 同 同 大 同 同 神
戸 阪 山 阪 澤 戸 澤 阪 戸
柳 同 閑 同 玄 同 雅 同 同 好 同 同 鎌 同 同 木 同 同 笑 同 同 志
川 々 偶
亭 生 子 幽 次 月 人 四 郎

瘦 せ た の を 女 將 待 つ て た 様 に ほ め
 新 ら し い 石 碑 が 雨 に ぬ れ て 立 ち
 集 金 の す つ か り 濟 ん だ 重 み な り
 大 丸 で 母 は 見 惚 れ て 買 は ぬ な り
 出 稼 ぎ の 朝 飯 蟬 も 啼 き は じ め
 奉 公 に 南 京 蟲 を 知 り は じ め
 貧 民 に や る の で は な い マ ル キ バ ン
 太 陽 は 夜 の 女 を 照 し す ぎ
 よ く 泳 ぐ 人 だ け 沖 へ 向 い て る
 一 生 を 楊 子 く わ へ て 暮 さ ん か
 別 莊 の 夏 へ 女 中 も 行 け ん 云 ふ
 自 由 畫 の 家 電 燈 も ち や ん ぎ あ り
 趣 味 の 家 子 供 に 少 し 淋 し す ぎ
 皆 寢 よ ん 云 ふ の を 妻 が 立 ち か ね る
 鬼 灯 の 寢 姿 赤 き 絹 團 扇
 ほ め ら れ て 襟 か き 合 す 女 の 子
 出 戻 り の ひ こ り ミ シ ン を お ほ へ る 氣
 初 戀 こ 云 ふ 真 似 だ け も し て み た し
 出 戻 り の い つ そ 稼 い で み た う な り
 斷 念 が 出 來 ず ば 俺 が こ り も た う

大	同	東	同	大	同	豊	同	松	同	姫	同	平	同	大	同	石	同	大	同
阪		京		阪		中		山		島		塚		阪		川		阪	
喜	同	雨	同	里	同	石	同	大	同	觀	同	城	同	悟	同	柳	同	狂	同
				十												月			
由		月		九		竹		樓		月		月		空		坊		雨	

親友にせられて少し迷惑な
 道具方山をかゝれた汗になり
 洗ひ髪書留が來てちこあはて
 性分が合わぬその儘兒が産れ
 皆勤のそれが眞面目な譯でなし
 死ぬるのに御氣嫌なきがされるかい
 食ふて寝て不足も言へて無事にゐる
 曳舟の速さおしめが風を切り
 暫らくは繼母あれもこれも褒め
 移民する霸氣を親類中がさめ
 逆境の死は略歴で隅に載り
 親しさは大阪辯で知事に會ひ
 夜行にて大平洋の月を見る
 さがしあぐねて辻へ立つ母
 あたゝかい飯にありつく瞳をひはり
 刺身屋を頼まれてゐて眠くなり
 寸檢の木場にお客も一寸濡れ
 米の値の話になつて妻を呼び
 一升買する風呂敷の廣過ぎて
 日盛りの貨物列車の長いこま

大	同	松	同	大	同	吳	同	大	同	長	同	大	同	釜	同	大	同	東	同
阪		山		阪				阪		野		阪		池		阪		京	
公	同	大	同	與	同	仙	同	勇	同	柳	同	卯	同	湖	同	沒	同	賣	同
				詩		人				兒						食		茶	
二		鷺		夫		掌		宗				三		舟		子		亭	

同 堤 同 島 同 堤 同 大 同 松 同 大 同 松 同 大 同 豊 同
根 阪 山 阪 山 阪 橋
同 幻 同 專 同 太 同 醉 同 雨 同 凡 同 雨 同 菊 同 縁 同
句 の
草 路 路 亭 眠 郎 子 路 雨

廢兵へ女房留守居になりすまし
子を叱り妻を叱つて今日も暮れ
手拭地逃げ出すやうに膳を立ち
用心に持つてた金を拂はされ
貰ひ子の方が優等取つて来る
来るや否マ、云はせる繼母なり

七月廿一日主人三女死去す(二)

あみ物を半分にして死にました
美しい話で笑ひくねる
蚊帳吊つてやれ流しの妻を呼び
洗濯へ脊中の痒ゆい子供が来
じつとしてたまる身分へケチをつ
手鹽をかけた金の淋しさ
あの人の半分でも金のこ
抱かれた子波のたんびに捧けられ
カフエさへ来れば陽氣と思つて
明もさに戀人少し放れ氣味
降りだした雨へ市内の傘の渦
お早うさ云ふに無口は欠伸をし
一軒を構へ自炊のてれくさし

大阪

吐句坊

小樽

輕舟

大阪

桂枝

大阪

小六

同

素晴

同

蒼梧樓

大阪

同

同

永双

同

同

金澤

今雨

同

同

大阪

同

二五

光哉

蹴躑く程来て子供禮をする
 濁流にころんぐ桶ながれ
 榮轉の今日は女將の酌で酔ひ
 グム取ちよいく母が會ひに来る
 見むすいた嘘もだまつて聞く佛
 金が大事か操が大事か咄
 この人出かまはす歩く四人連れ
 石女の日課は猫を洗濯し
 一寸した顔が勤めの邪魔になり
 行水の湯にむつゝする裏の溝
 財布買ふ入れるあてきてないものを
 紫陽花の雨に打たれてかなしかり
 言ふまゝになるもお金のせいですの
 ワイシャツをまくり審判官になり
 出るやうになつて葬式拂らす
 朝顔へ早起の足向けるなり
 父親は五十で功の無きを恥ぢ
 太陽を拜む氣になる天幕村
 年頃の娘二人へ氣がつかれ
 休憩所皆それぐに何か食ひ

大 阪 一 舟
 松 山 計 加
 大 阪 正 春
 名 古 屋 草 石
 大 阪 一 柳
 松 山 文 芳
 大 阪 己 代
 松 山 桔 梗
 大 阪 樂 鳥
 大 和 勝 二
 大 阪 柳 影
 山 口 恒 子
 大 阪 秋刀魚改メ小宰相
 函 館 竹 二
 大 阪 一 里 齋
 明 石 水 車 亭
 大 阪 英 賀 夫
 神 戸 卯 生
 大 阪 山 茶 花
 京 都 繁 坊

京大兵大畝大兵大島大堺大兼二大愛大尼ヶ大福大
都阪庫阪傍阪庫阪根阪阪浦阪媛阪阪崎阪岡阪
佐世鬼憲籬豆無苔靜遠清麥花孤空喜白三不沐
近逸香子
顯奴樓太櫚秋鬼龍流志路角夢愁山樂鶴平忘天

欠伸するなごゝ赤子に笑ひこけ
 押賣の買ふまで去なぬやうに見せ
 失職に追はれ郷土に親しまん
 配達の覗いて見たい人だから
 緊縮のため圓タクに乗るご云ふ
 鹽焼の鮎へ動いたのぎ佛
 修養の二字に暑さの身を忘れ
 新婚の友へ御無沙汰つゞいて居
 日輪を追ひこむやうに灯が點る
 こいつがご思へご金がものを云ひ
 亂れかご母が探せばきつご出る
 今日雨西瓜にちつご蠅がゐる
 云はすごも頼むご云ふは金の事
 哲學の力へ情の齒がたゝす
 舟のりの疊の上で死ぬぞよき
 先生へ言譯だけの子の貯金
 シートノック危ぶくくゝる赤蜻蛉
 氣樂さは裸で涼む露路に住み
 殘された先妻の子は皆達者

大阪	松山	同	同	大阪	東京	兵庫	島根	尼ヶ崎	兵庫	京都	神戸	大阪	京都	嵯峨野	大阪	尼ヶ崎	釜ヶ池	大阪
嘉月	白梅	四五	青果	健坊	石涯	陽春	雷相	虛白	風水	柳村	柳	折	潮多	さだ	秀聲	運坊	鶴峯	

ものの申に

手間をとらせる眞ッ裸

(續)



蛭 子 省 二

竹夫人(附)虎の語

散歩の道すがら、珍らしくも一ケの竹夫人をみつけた。不用になれば蒐集の杓子容に適當だミ、たづねてみるミ値がわからない。後日を約して歸つた。

切抜で置いた『報知』の徳川義親侯のジャガタラ行を読むで居るミ、シンガポールの話の中に、『寢臺の上には抱へ枕があるミ、支那の竹夫人、ここではダツチワイフといひます、長さ三尺位のくくり枕の様なもので、暑い處にはお腹を冷さないために必要なものです。恐ろしい長い枕と思つて、本當の枕をはねさばして寝た人もあります。風俗習慣の異なるミころ、巧くもない喜劇が起ります』ミ、古は長枕があつた。古句に『も

のゝふの油じみたる長枕』

天にあらば比翼の籠や竹夫人
竹夫人冬は鼠の子を孕み (古狂句)
竹夫人 兎屋のかかアかと思ひ (古句)

竹夫人は湯婆子に對する名で、抱籠の事竹几とも稱し、市井にかくれた大隱味のあるもの、モダン人にはわからぬ。事文類聚に竹夫人傳があつて、詳であるが、四角な文字許りだから略そう。和漢文操卷七に、良靈峰の竹夫人傳もある、簡にして妙末尾に、

山谷が家にかへられ、石牛洞の添寝には、鬚の因果を恨ながら名をさへ青奴さかへられて、今さら冠者のさまながら、禮李昭華と籠をあらそひしに、其人も遠流の事おこりて、此洞のひさり寝もやしければと、菩提所の黃龍寺にあづけられしが、反故籠にや

成果ぬらん、煤掃の後の行衛をしらす

山谷詩集に、趙子充示竹夫人、詩蓋涼簾竹器、態體休膝、似非夫人之職、予爲名曰青奴、竝以小詩取之、穠李四絃風拂席、昭華三弄月侵床、我無紅袖堪娛夜、政要青奴一味涼、長さ五六尺の物愛すべしである。陸放翁の詩にも、空牀新聘竹夫人、羅鶴林玉露亦載

×

私は配達された東朝(六月十六日)紙を開く、『虎十七頭を射止む』の見出が目につく。徳川侯がカンボジャ附近に於ける猛獸狩旅行の收獲だそう、巨象四頭をも射止むとある。筆の序に朝鮮の虎を添へよう。デこれは昔咄、今日京城の市中に白書猛虎が横行するなごも、蕃地視せられては困る。今秋朝鮮博が開催され、多くの同志が渡鮮されるに先立ち、一興にも存するのである。

内地の某柳諒へ『動物一切』なる題を課した處、牛馬犬猫に盡きて、虎は一疋もなかつた。動物園の虎なきも、見物ファンの多からざる事がわかる。猿の方が滑稽味が豊かなので御愛嬌であらう。

虎のなき聲をきかれて儒者困り

私も困る一味、明治初年文部省で、小學讀本編纂の折り、鶏のなき聲につき委員間に三説が出た、『コケツコー』、『ケケツコー』、『トテツコー』、互に主張をゆづらず腕力沙汰にな

つた。『あまのくくつ』に、『北窓瑣談に、長崎にて、唐人石火矢の音をビーン云云よし記せるは、誰より聞しそら言なりけむ、今正しく、唐人の耳にききこりていふところは、鐵砲の音、ベン、大筒、ボン、石火矢、オロン』、箕き頃、片上齋藤兩氏に佛法僧の鳴き聲で議論があつたやうだ、此の事では古の物識りも随分、書き残してゐる。結末のつかぬ處が儒者困る面白さかもしれない。鶴は都々留々こ或は知々興々こ、だから千代を諺く鶴は考へ得たりで、郭公は保々登々こないたのを、保々於那紀興々聞いて、法華經に因む、こんな話は囁々筆話の岡部東平の文にある。

海游録(鮮人申維翰、享保四年日本へ使者たりし折りの紀行文)には、日本人は皆な虎を知らない脆弱さだと言つて居る。

余江戸に在るとき一倭人問ふて曰く、日本には虎豹がない、未だ其狀を知らねが、其嚙牙胸爪、人を食して糞爲し、一吼して蒼屋裂く、烏獲孟賁の勇も亦敢て前に當る莫しと、若し果して然るせば、貴國の多く虎豹の皮を用ゆる、未だ知らず何の術ありて之を屠るや、余曰く天地の間人を食するの獸は人の食する處とならざるはない、我國の虎豹を制するには或は筆を以てし或は銃巨箭を以てする、西北邊郡の村には官勇士皆鐵甲を以て臂を被わり、よく徒手擊殺するもの比々、又虎を食する獸がある、名づけて麗さいふさ、群倭相顧みて色を失つた、大抵日本は徒だ虎豹のみならず、亦熊羆獵獵の人を食ふものがない。皆な脆弱で詐謀に長じ威武に短である。其の聽聞をなして驚愕する此のごさだ維翰は大ボラ吹である丈に、事面白く説いて居る、朝鮮が

禿山に圍まれて居る理由は寒氣を防ぐ燃料關係であるは申す迄もないが、虎害の餘りに頻々たる爲めに其住地たる森林をやたらに伐倒した事にも因るので、三國遺事を讀むに流石に虎關係の記事の多いのもわかる。中の一項に、南山の寺知巖に會して國事を議する時に、大虎有り走つて座間に入る、諸公驚き起つ。而も関川公は略も移動せず、談笑自若として虎尾を捉へ、地に撲つて之を殺す、なき出て居る。

江戸時代の隨筆で虎さいへば悉く朝鮮に縁が結ばれて居る日本虎は異國で鬼と呼び

清正をもて最とするが、『忿のすさみ』に、『薩摩の士の語りは義弘朝臣朝鮮在陣の時、足輕馬草を刈んきて山涯へ出しに虎一つ来て、頸もこを軽く喰へ、山深く入、手玉に取て慰む。猫の鼠を玩がごさく、久しく成て眼くらく、心きへ入しに、虎は其上に横はりて眠りぬ。時移りたるにや此勇正氣付て見れば、己が上に眠るる程に、靜に彼が腹を撫ければ舐出けり、其時己が腰に附置ける細引を、臥ながらひき出し、虎の淫囊をまさひつ、さて靜に口に、なを眠つて居ければ、その繩を大木に固く結び付置早く歸つて同刃引つれ往て、それを驚しければ虎怒りて前なる岨へ飛けるに、淫囊切ればなれければ、即死ける。其皮を剥て國君に奉りし、今に重器の蓋になりてあるよし語りぬ』、取つたトラの皮算用である。

清正が朝鮮陣中に虎狩をした處、虎は馬を喰はへて高き矢來、飛越したさある(異説まちまち)、『雨森東五郎、朝鮮に在留して虎の吼るを聞けり、壁なき落、磁器はヒビキの入やう成こ也』と、虎狩記事は半日閑話十二にあり、それを詳記したので翁草卷三に出て居る。これは日本人の武勇の逞した物語である。釜山浦には和館といつて對馬から建てた官舎があつた。昭和辛卯三月二十三日の事、丁度市日であつたが、虎が居るこの事に、すて置かば人畜に害をなさむと、直に鎗鐵砲棒千切木を撃つて狩する事になつた、朝鮮人は龍虎と並稱する虎を、鹿を獵るいであつて捕獲し得べき事があらうかと皆冷笑したので、名譽にかけても勇氣を逞うし、小出小平太、齋藤小次郎、小田又吉其他、二虎を殺し、一つは塩漬に、他は疵多ければ、皮を剥き頭をそへ、飛船で對州へ送つた、翌日東蒙府使より、其勇氣の功に感じ、白米二俵、鷄十羽を寸志として贈つてきた

觀日本武人捉虎

朝鮮人

掉尾爲旋頭是城

吼時霹靂驚風生

日東雄士真多力

驚地爭傳馮婦聲

員鳩雀怒氣吞牛

豹變文章三錦浮

勇士鋒端周處績

春風自貢海東舟

『虎の味雞の如し、自極宣物の由に御座候』とある、私の食べたのは味噌漬であつたから味は何とも言へない。『美味求真』には、肉質は猫肉に似て猫よりも大味なり、とある。



錯覺外道

—故に我々は我々のアタマに感謝しなければならぬ—

川上三太郎

A
私は頗る慎重な態度で机へ向ひました。だつてこれから伯母

さんの所へ金を借りる手紙を書くんですからね。無心狀のセンチメンタルは飽まで實際的でなければなりません。そこで私は頗る慎重に文意を練り、徐ろに書き初めたのです。

「伯母さん—」

毎日好い天氣が続きますね。然し餘り斯うガランとした日が續くのは却つて貴女の持病には不可ないンぢやないかしらご案じても居ります。全く頭痛は苦しいですからね。ミコころで苦しいと言へば少々お願ひがあるのです。今まで幾度か思ひ切つて申し上げやうかミコ考へたのですが、如何にも意氣地のない話なので、實は今日まで我慢をして居たのですが、何

うにもやり切れないので一切を露骨に申し上げます。濟みませんがお金を五十圓程拜借願へませんでせうか。

私は目下或る銀行へ勤めて居ります。然し月給は四十五圓なのです。これでは幾ら私が獨身者で二階借をして居てもやり切れたものではありません。その上何の因果か銀行員といふ者は始終小綺麗にして居なければならぬのです。

「銀行員は君、御客商賣だからね」

ミ支配人は何時も言ひます。此の意味に於て我々は旅館の昇降機給仕や活動の辯士と同じです。只我々ミ彼等ミ違ふところは、彼等には祝儀があり拍手があるのに、我々には何も無い事です。いや何もないミコころか萬一現金でも不足しやうものなら、なけなしの月給の中から差引かれるのです。連も

やり切れたものではありません。

私は拝借したお金でカフェへ行つて女給に入れ揚げたり、無駄使ひをするのではありません。私は今の若い男たちが何だつてあんなカフェの女給などに夢中になるのか解りません。燐寸の棒で引張るなめくちのやうな氣味悪く細いあの眉毛、毒々しい口紅、その癖足袋から踵がハミ出て居るんです。

拜借したお金の半分で私は洋服を買ひます。勿論既成品で結構です。私は氣取るのが大嫌ひですから。あこの半分はそれを月謝にして今少し英語を勉強したいのです。今でも外國人ご會話なら出來ますが、學問にこれといふこところはありません。一生勉強する心算です。何卒、私の此の眞情ミ事情を御推察の上、御聞き濟みの程をお願い致します。何れにしても二三日中に參上委曲を申し上げる心算で居りますでは御身體を御大切に——頓首」

B

さてその次は柴山といふ金貸へ手紙を書くのです。此の男の名刺を見るに柴山金融合會社々長とありますが、實は自分ミ妻君の共同經營で、百圓貸して毎月十圓づゝ一年で皆済こいふ振目のない商賣をやつて居るのです。私は昨年フイミ此の男の甘言に乗せられて、借金しましたが随分苦しみました。ごころが相手は私をよいお得意様さでも思つたのか、それ以來度々やつて來るのです。何うやら階下の夫婦も悟つたらしく、友達が來て居る時などは實に工合が悪いのです。ですから少し法螺を

吹いて、今後足踏みをして貰ひ度くない——要するに金貸へ宛ての縁切狀です。

『その後何うです——』

持病の疝氣も起りませんか。何しろ斯う好い陽氣になつて來ちや連も病氣なんぞはしては居られませんか。此の間も箱根へ行つて來ましたが、箱根の湯は疝氣に好いさうですぜ何うです二週間許り湯治をなすつては！幾らも要りませんよ二百圓もあればいいでせう。貴君は僕ミ違つて生れつきの下戸だから、遊ぶ必要もなしさ。

此の頃僕一寸景氣が好いんです。銀行で主任代理といふ拔擢的優遇されましてね。もう何うやら貴君の御厄介にならずこも濟みさうです。何時まで二階借でもありませんから何處か郊外の閑靜な所へ引越す心算です。それに此の頃は毎晩招待やら宴會やらで殆んど家に歸りません。何れ引越したらお知らせしますが、それまではお訪ねになつても不在勝ちですからそのお心算で——その中僕の方から資本の御融通の話に伺ふかも知れません。早々——』

C

最後は逆も愉快な手紙を書くんです。ちとお話し憎いのですがねへ、へ、へ。實は彼女へ宛てた一通なのです。エ？彼女ですか、彼女はカフェ、ドラネコ、御存じでせう、あすこの女給です。しかもドラネコ中のスターですよ。ヒカ一なんです。モダンですよ。グララ、ボウのお蝶といふ綽名がある位なんです。僕は毎晩大低出掛けます。手紙

も五六度は出して居ます。その度に何時も素敵な返事を寄越すんです。青年の心を捉へずには置かない女ですよ。そこで僕も大いにヴァレンチノ張りて——。

『親しき君よ——』

何だか大變お目にかゝらないやうな氣がします。そのくせつい此の間お會ひしたばかりなんだのに——。矢張り氣が合ふまでも言ふのでせうね。

あなたの一言、一舉手、一投足が何んなに私を勵まして呉れる事だせう。全く僕はあなたがあるが故に今日の生活が満足にやつて行かれるのです。此の意味に於てあなたは僕の恩人です。一生涯の恩人です。

何うもお目にかゝらずには居られません。會ひませう。直ぐ會ひませう。さうしてもつゝ僕を勵まし後援して下さい。僕の魂は既に誰かさんのところへ飛んで行つて居ります。ではさやうなら——。

D

彼女は餘りクドク書く事を嫌ひます。ですから、此の位でさつぱり切り上げて置くのです。さてこれを各自宛名を書いてポストへ入れた私は、その晩位よく寝られた事はありません。伯母さんからは金が借りられる、金貸しは縁を切る、戀しい彼女とは益々離れられなくなる、實に意義のある三つの手紙でしたからね。エヘヘ。

E

二日経つて返事が來ました。僕は銀行から歸るご机の上へちやんご乗つて居たのです。私は先づ一番上のから順々に封を切る事にしました。一番上にあつたのは伯母さんから來た返事でした。

『主任代理に拔擢された由結構に候。然しお前を主任代理に拔擢する銀行は何さいふ銀行だか、若しそれが妾の取引銀行だつたら一度に預金を引下ける心算に候。箱根へお遊びの事御申越の通り妾は下戸故別に羨ましくもなし、お前が何處へ引越さうと別に訪ねる氣も起らず御安心なさるべく候。最後に妾の持病は頭痛にて疝氣にてはこれなく候。かなり失禮な手紙、再三精讀仕り候。何れにしても御立身のお前、將來これを機會に無心にはもう參らぬ事存じ候。又妾もその御相談には應じ申さず候。かしこ』

目下疝氣ではなく頭痛に悩みつゝある少し腹を立てゝ居る

伯母 より。

F

こりや少しヘンです。可怪しいですね。今度は柴山からの返事を讀んで見ませう。

『御親切な手紙有難拜讀仕り候。元來小生は外を歩けば銀行か質屋、字を讀めば數字より外目に這入らぬ男にて候が、

貴下の情味深々たる御書簡に接したる時は、聊か異様の感に打たれ申し候。殊に小生が過般御用立てしたる件を以て一生の恩人なりしか、今日の生活を満足して居るさか御申越しに候へ共只々汗顔の外はこれ無く候。仰せに従ひ従前は御友人その他の手前少々御遠慮致し居り候が、今度御許しを得たる上はこれまでに輪をかけ、頻繁に御邪魔に上る心算に御座候に付、何卒舊に倍し御眞眞御引立御用命の程偏へに奉願上候。敬白

尙、今後御馴染甲斐に利子の點に付特別の御相談に應じ可申候

柴山金融會社社長
柴山君 平太

こりや愈々可怪しい。ヘンです。では彼女からの返事の封を切りませう。何うも何だか心配です。

『嘘つき』

アンタは大變な嘘つきね。銀行の頭取の一人息子で、親父は將來に男爵になるんだつて来る度にさう言つてたぢやないこころ月給が四十五圓で二階を借りてる若旦那さま！おほいほい。

それは何うでもいいとしてアンタはよくもカフエの女給をケナしましたね。足袋から踵が出て居るつて？はやりさま

あれは此の頃の足袋がみな小さいからよ。妾たちの踵の故ぢやないわ。それに一體アンタは何ういふ譯でアタシにお金を貸して呉れなんて圖々しい事を言つて寄せたの？アンタはアタシの何でもないぢやないこころ？随分背負つてゐるのね。英語を勉強するツて？アンタ英語よりもツツ日本語を勉強なさいよ。その方が緊急問題よ。おほいほい、失禮、御免遊ばせ！

カフエ、ドラネコにて お

蝶

大變です、大變です……私は伯母さんへ送るべき手紙を戀人に、戀人に送るべき手紙を金貸に金貸に送るべき手紙を伯母さんに送つてしまつたのです。あゝ、これで戀人とは縁切り、伯母さんの家へは出入止め、金貸ばかりが油蟲のやうに附着いて来るのです。大變だ。大變だ助けて呉れ！

H

さて何だつて私は斯んな下らない事を長々喋つたのか。それは要するに別段斯んな事も起らず伯母さんに、戀人に、金貸に、それ〴〵三本の手紙を間違はずちやんこポストへ入れて居る愚鈍ながらも我々のアタマに、對して我々は深く感謝しなければならぬではないか。

ミ、彼は僕に言つた。さうして僕は彼が七本目のビールを抜かうとして居たからその儘、さうだ、その通りだミ、がつてんぐをした事である。

柳翁忌偶感

◆ 安井ひろし ◆

毎年柳界秋の行事として柳翁忌が営まれる今年も各川柳社それ／＼に柳翁忌句會が盛大に行はれた。まことに柳界の隆盛を語るものゝ欣快に堪へない。

柳翁忌の名稱が初代川柳忌、川柳忌、川柳祭等々區々たる事は川柳の社會接觸上不利益だから一定する要があるといふ説をきくが、子規忌にしても糸瓜忌とも稱し、皆一樣に正岡子規の忌日なる事を社會は認めて居る。柳翁忌も川柳がより社會化されたなら初代川柳忌であらうが

單に川柳忌であらうが、柄井川柳の忌である事を社會が認める事勿論である。要は名稱の末節ではなく、まづ川柳の文壇的地位を向上せしめる事にある。

また柳翁忌を各川柳社が各自に催さず合同して舉行すべきだとの説もきく。然しこれは各川柳社の幹事の役割等の難

關によつて實現出来ないといふのが、これを唱へる人々の實現不可能の原因として語られるところである。然してこの事がまた川柳の社會化運動にも提攜出来ない所以の如くにも考へられて居る。私はこの考へ方と異つた意味に於て各川柳社が各自に川柳忌を行ふ意義、各川柳社が各々柳誌を發行し、各々獨自の句會を催す事の意義を述べたい。

即ちAの川柳社は柳翁の偉大を偲ぶと共に、柳翁の創見である川柳が發句の約束から脱脚した形式の打破、取材の自由表現の自在といった柳翁の革命的 정신をうけつぎ、進みゆく時代と共に形式表現手法あらゆるものに新味をこり入れ、柳翁創見の川柳精神のまことに川柳圈を擴充して、そこに新しい川柳を生もうとする

進歩的意圖の下に、柳翁忌を通じて眞面

目に自己の川柳を検討し、反省し明日の飛躍に供へんための日としたいと思惟して柳翁忌を行ふ。

Bの川柳社は柳翁の偉大に對し敬慕すると共にこのお祭りを盛んに催して楽しく愉快なる一日としたい。そして柄井川柳の作つた川柳形式を墨守して、それの埒外に出る事は柳翁の意志に反するものだといふ信念によつて行ふ。

Cの川柳社は我等のお先祖の忌日だから皆よつて句を作つて樂しまう。等々の見地から行ふ。之らの川柳社を一つにして柳翁忌を營む事は如上の意義を没却して單なるお祭り騒ぎ化するに過ぎない事になる。かゝる事は川柳を醜惡化するのみで柳界を退歩せしめこそすれ、柳界の進展をなさしめるものではあり得ない。

此意味に於て私は各川柳社獨自の立場から柳翁忌を營み各自柳誌を發行し各自句會を催す事が柳界の隆昌を來す所以である確く信じる。

同じ釋迦の教を弘めるにも法華あり淨土あり禪ある所以である。各自の信ずるまことに向つて進む事が柳翁へ手向け

の萬卷の經文だと思ふ。(四、九、二三)



飛燕
往來

川上三太郎氏(東京)路郎宛

歸京速かに手紙を書く筈でしたが、僕の姪が急死して居たため、維用今日に及びました事をお許し下さい。滞阪中は例に依つて御厄介になりました厚く御禮を申上ます。殊に奥様に御多用のところをお邪魔して済みませんでした。姪は今年三才でした僕の歸宅する三時間許りに死んだのでした。患いついたのが恰度大兄と奥様と三人で、泌々萬世橋下の子供と藝人の話をして居た時と同じ頃らしい話です。身にしてみました。家内はみんなその方へいつて仕舞つた留守の中へ歸つた私は闇中その計を聞き暫く佇立した儘 左右の土産物を疊の上へ置くのを忘れて居ました。何れいつか貴誌の餘白を借りて書き残して置きたいと思つて居ります。

川柳漫談は一氣に讀破しました。大兄に此の輕妙な筆致のある事は實に意外でした。勿論より多く嬉しくなつた譯です。先は取り敢

へす御禮まで早々 九月十一日

長崎柳秀氏(南獨)路郎宛以來は御

無沙汰平に御免被下度候 御地暑氣甚だしき折柄なれば如何お暮し被遊候や 當地也未嘗有の夏殊更旅の身にこたへ申候 去る十三日

オランダ國內に入り數日滞在 それより 下

ライン河にそへる 大學視察に日を過し目下

スキツツルパーゼル市よりひるがへし南獨

フライブルクへ來り申候 七月二十三日 フ

ライプルクにて長崎

富士野鞍馬氏(東京)路郎宛

宮の下なら屋で一泊堀福で中食男女二十人

騒ぐこと避暑客を喜ばすごてらな着て、未明

長尾峠に日の出を待つも寒さで駄目、信心が

足らぬか。「箱根通長尾峠へ朝を來る」對浴

衣箱根まで來て手を通し」

淵田忠良氏(東京)社宛

拜啓朝夕涼しく相成申候 皆々様倍々御清勝

奉大賀候 諸毎々川柳雜誌御惠送にあづかり

ありがたく存候、拜讀後地方の川柳愛好家に

順次送り居り候ところ いづれも非常によろ

こび居候 先づは右乍略儀御禮までに候時節

柄御自愛祈上候頓首 八月三十日

蛭子省二氏(朝鮮)路郎宛

拜啓朝夕は樂になりましたが、貴地方惡疫流

行御油斷ならぬ事と存じ上ます、初秋は却て

注意を要します。九月號及川柳漫談御禮御厚

情萬謝申入ます。貴著は小妻が獨占してしま

ひました。私の讀後感は十一月號に發表し度

く存じます。昨一日は朝握飯、夕五色揚と云

ふ震災當時の追憶に耽りました。然し晩酌は

傾けましたが、本日より本年度の禁酒期に入

ります。酒呑みの禁酒はあやしいものですが

斯くお知らせする事に因り、實行が出来る事

なるのです。持病は時々發作、一度で元氣が

衰せてしまひます。「食ふべくもないのに被

てる絹の羽織」は私の身の上に當つてゐる「出

稼ぎへ父の命日さくにすぎ」此句は一應作者

に自釋を貰ひたかつた。下五がなめらかであ

りませぬ。多聞氏の旅行記面白しビルの固

いのはコンクリ建つてだからでせう。殊に私の

室は石が敷きつめてある 阿々 九月二日蛭

子生

岩崎柳路氏(東京)路郎宛

永々失禮してゐます、何共申譯ありませんが

どうぞ不惡お許し下さいませ。私事今夕出發

京城の博覽會へ出品に參りますから 來月歸

京の際光臨省二氏方へお寄り致す積りです。

尙一度御地へも立寄る豫定です、さて甚だ失禮乍らよしの奥様へ一寸面白き物を別便小包便にてお送り申ましたからどうぞお受取り下さいませ。使用法はカツチケヅリ、立てると人參、大根、瓜等青物一際ケヅレる、夏は氷もかけます。渡鮮の上は即時お便りいたします。又後便で草々 九月五日

淺井冷々子氏(松山) 〓 二柳子宛

(前略) 御多忙中を御旅行の趣き羨望の次第に御座候 大和富麻寺よりの御健吟謝入候却說九月當支部例會素人先生留守中の處無事開催致し同封詠草御送附申候間 よろしく願上候、然る處小子選に係る(題マツチ)左の句を小子が訂正(字句)轉換 頂載致候處問題となり、よいわるい軍扇揚らず就ては月評廻上に掲げ度候處如何に御座候や よろしく御取計相願度候

差し向い煙草へマツチかまへてゐる 原句
差し向ひマツチへ煙草かまへてゐる 訂正
想の古い新しいは別として 字句を置き換へたのがよいか悪いかの義に有之候 衆議月評へ出したらご同封送句へは訂正して?を附あり候よろしく願上候 時節柄御自愛專一の程祈上願 九月八日

前田雀郎氏(東京) 〓 路郎宛

拜啓めつきり秋らしくなりました、久しく御無沙汰いたしてゐて申譯ありません。昨日小閉を得ましたので約束をはたす爲め原稿を書きました。評論ではありませんが別送いたしました。その中また大阪へ行き度いと思つてゐます。奥様によるしく 九月十二日

西山玄々子氏(伊豫) 〓 路郎宛

先生御機嫌ですか、私は今此の堤に坐つて天地の雄大さを禮讃してゐます。加茂川の清流に對する時失業も生活苦も忘れ 心の奥底

投稿規定 一部改正

▼近作、柳、梅、及課題吟の投句用紙は葉書又は同型の厚紙に限る

(句は縦に書き各題別紙に認めること)

從來半紙又は同型の野紙に定めてありましたが、半ビラの紙や巻紙のきれつばしや、甚しいのなるこ葉書などで投句される方があつて綴ちて一冊にして選者へ送るのに非常に不體裁であり、綴込みに困難であり、選者の方でも選句上大變不便で閉口されてゐるのでありますから、その點をお考へになつて規定は嚴守して頂きたい、葉書は必ずしも官製には限りませぬ。私製はがきであれば從來のやうに他の投句稿と同封で郵送することが出來ます。

深く葉食つてゐる 或る物を洗ひ清めらるゝの感がいたします。噫呼自然の美!!! 九月十二日伊豫西條にて玄々子

岩本素人氏(松山) 〓 路郎宛

ぐすくして、十一日の晚大阪を立ちました十三日から勤めに出てます、先づ當分は松山に居なければならぬでせう。お序の節「川柳漫談」一部御送りを願ひます。僕自身の分ですから句をどうか御染筆願ひます。他の人達にも實物を見せたいと思ひます。おくさんへよろしく歩や桂馬の方々に

川柳類題索引 (9)

川柳雜誌自第一號至第五十九號

安井ひろし 共
越村加香 編
安井欣女 編

題の配列はすべてABC順、題の下の日
本數字は川柳雜誌の號數、算用數字は其
號の何頁を表はす。

(十二) 通信、交通 (二)

終電 五二四六 三等車 五二四
出帆 五二五一

停留所 七一六 一三六二七
タクシ 二一八 燈臺 五〇五
停電 五八四三 停車場 五九五二

郵便 四二五〇 夕刊 三九四三
(十三) 雜

泡 二〇二二 五七七
網 五一五五 赤
青 五九四六 空 地 五八四九
新らしい 四九五八

小火 四七五 四九五一



一路集

(募集句)

稻妻 篠原春雨選

息すまる得點表へ稻光り
もの凄いにニヨッキリ避雷針
雷の繪は稻妻で生きてゐる
病室へ稻妻 凄く流れこみ
稻妻を大きくいふて戻つて來
稻妻の光る我が田へ笑みを投げ
しんみりこ縫うてる妻に稻光り
朝からの肩を稻妻入れさせる
稻妻の光らば光れ蚊帳の妻
稻妻に夜の旅路の拂りし
稻妻に一かたまりになる舞妓
稻妻も恐れず雨をよるこびて
稻妻に蚊帳吊る母のあはてやう
稻光り忘れだらいに見る浴衣
稻妻は便所の窓をおびやか
稻妻が膳のあたりへぞつこくる
稻妻にラヂオこわく聴いて
濡れタオル擴けたまこへ稻光り

八歩 湖山 圓助 公二 光路 世近奴 憲太 突支坊 市公 不 然 喜 由 無 鬼 蛇 蛇 馬 桂 枝 氷 又 遠 志 蟻 期 夢 花

稻妻に浴衣姿が二つ見
稻妻の夜を宿直は早く寝る
思ひ出した様に稻妻また
稻妻にふさ考へる身の置場
稻妻は寄り添ふ顔へ二度
稻妻に二人の肩がよつて
稻妻に喧嘩の子供仲よく
稻妻に二階の夫婦入りて
稻妻の間に 挿物入りて
稻妻のそれにも似たる過去
溺死者のあつた邊りに
稻妻にそれから話變つて
稻妻に動物園の靜かなり
剣闘が始まりさうな稻光り
戀人の姿稻妻の様に消
庭の隅にあんなものある
稻妻に女同志の恐くるる
稻妻へ見送るも怪つきたら
空 今 孤 繁 衣 黑 芙 三 竹 耕 青 鐵 狂 聽 恒 勝 柳 見
山 雨 愁 坊 童子 天 蓉 子 二 民 水 洲 雨 松 二 花 坊

胸算

橋本二柳子選

稻妻へ看病の水割りに出る 同
 稻妻に見送る船の見ゆ隠れ 菊路
 只一人残る夜釣へ稻光り 同
 稻妻に年貢の詰しち途切れ 沐天
 稻妻に丁稚おぎて嬉しがり 山茶花
 稻妻の物干何かぬれてゐる 同
 稻妻にミシンの音がハタご止み 同
 稻妻を門へ見に出る男の子 柳
 稻妻は汽車の窓から窓へ抜け 同
 稻妻にはつきり浮いた娘の浴衣 吐句坊
 稻妻の思はぬ所に人がをり 同
 致壇を女教師おりる稻光り 四方路
 凄く光りますご間借はおりてゝ 同
 佳吟
 稻妻に二足三足蹴けてみる 鬼逸樓
 稻妻にたかを巻くつた洗ひ物 凡句郎
 稻妻に小使帳を付け忘れ 賣茶亭
 稻光り貧しい通夜の夜が白み 竹二
 稻妻に父のかへりが遅すぎる 柳影
 よい時に歸へつた宿へ稻光り 一柳
 稻光り井戸に西瓜が冷てゐる 雪絨堂
 稻妻をよい事にして店を閉め 嘉月
 稻妻に寝返りをする乞食の子 輕舟
 稻妻にしつかりものゝ母の膝 市公
 稻妻に産氣ついたる妻こゐる 同

四一

[illegible]

胸算が合つて買物氣持ちよし 没食子
 胸算ミ胸算の差へ挟まれる 圓角
 胸算で戻る亭主に月あかり 助六
 胸算へお電話ですこじやと来る 同
 胸算の片手財布を握つてゐる 凡句郎
 胸算はあつさりミ四捨五入 同

欠伸

亂耽選

◇
 空想の舉句は頼りない欠伸 世近奴
 欠伸した帳尻は又見直され 氷又
 生欠伸三等室に蒸せて居る 空山
 待ち呆けの欠伸へ潮の上ける音 賣茶亭
 高座から欠伸へ少し當てつける 麥角
 散髪の順番を待つ生欠伸 菊路
 失業の欠伸その日の暮れるまゝ 四五磨
 猫欠伸してなぐらゐる場所を變へ 竹二
 棚元をながめ病上りの欠伸 青果
 按摩もう更けた欠伸を聞て去に 公二
 欠伸して居ても利息が這人て來 豆秋
 起きたらしい欠伸嚙縁をかへず 光哉
 反駁もし得ず欠伸に否定する 湖山
 欠伸もう夜業がすんだ顔になり 秋刀魚

佳吟

胸算が出来てステツキこんぢき 市公
 胸算は爪かむくせを持つて居り 石涯子
 胸算へ今日の相場はあがつて居 雷相
 胸算がブラジル行きを思ひ立ち 虛白
 文官にして胸算が上手なり 十三絃堂

佳田亂耽共選
 楊井二南

◇
 満員車變な欠伸を肩へされ 雨月
 遠慮ない仲の欠伸は横になり 喜由
 欠伸してまだ紙屑が撰りきれず 嘉月
 交際さあきらめ欠伸隅に居る 憲太
 欠伸してつくづく齡を思ふなり 光路
 ◇
 堪わられぬ欠伸扇子の影で消し 湖山
 按摩もう更けた欠伸を聞て去に 公二
 欠伸して帳尻は又見直され 氷又
 戎橋欠伸出るまで涼んで居 秀次
 客のある時の欠伸を叱られる 孤愁
 欠伸から父秋風を告げに來る 木偶人
 貴賓席欠伸扇へ畳み込み 常次
 眞剣に生きんミするに欠伸が出 鐵洲
 女房の愚痴へ欠伸の手が延びる 狂雨

問名
 刺題

虫の聲
 五七四九

乗人合
 二合蟻

二合蟻
 一六四三

女表お音
 湯染

五七七
 五三六

履歴書
 一八七五

ペンキ
 二四一五

精進
 四一八

商品券
 一三三

新支店
 一三三

小兒科
 一四一

紙寢山
 三三三

倉庫
 三三三

BUILDING



電車

梶元紋太

世の中のテンボが早くなつたと言ふけれどもまだ早くない世界もあるものだと思つた。僕が改札を這入るゝ同時に電車がにり出したので仕方なく次の發車「はるゝ」さいふのへ乗つた。何分か経つゝ僕の乗つた電車が動き初めた。今から三十分分するゝ大阪は梅田につくののだが其から市内電車に乗つて揺られゝて會場につけば既に八時に近い時間になるだらう

市内を圓タクにするゝ二十分は短縮出来る、もうすつかり日が暮れたがさうしたもののだらうゝほんやり考へてゐるゝガタリゝ停つた。漸く一つ停留所を來たばかりだ。何ゝ云つても動くだけしか動かないのだからゝ觀念の眼を閉ちて居睡るゝことにした。八方へ氣兼ねしながら上品に構ゐるのは六つかしい。これが僕の大阪へ行く道すがらの光景だ。將來飛行機で五分も掛らず句會へ出席が出来るやうになる時代のこゝを想像するゝ現在の自分

の大阪通ひの光景たるや實に漫画ものかも知れないゝ人知れず憐びんの情が起つて來る。併し又一面から考へるゝ家を出て句會につくまで約一時間半の時間が掛り。その殆んどをうつらゝゝみやつてゐるゝこゝを思つてみるだけでも氣の長い、それを一往復して約三時間を費すなゝゝは百年後の川柳家には何う思つても解し得ない心境だらうゝこのんびりとした太平な光景も今のうちに味はつて置かないゝ意味はへなくなるかも知れないのだゝも思ふ。電車がガタンゝ停つた。二つ目の停留所へ到いたのだ。

川柳と個性

— 黃吻錄其の三 —

松丘町二

江戸の詩人達が持つてゐた感官の鋭敏さゝ、言葉のデリカシイさは、世界に比類なき人事短詩『川柳』を生んだ。遠慮勝な俳句では一指をも染める事を許され

ない特種の世界へ……あるゆる世相へ、彼等が如何に鋭い凝視を注いだか……。

斯くして彼等は川柳と呼ぶユニークな短詩を創造した。彼等には彼等のみが持つ特異な個性が、燦然として彼等の所産川柳の上に輝いてゐる。而してその個性は川柳詩人全體としての一つの偉大な個性だつた。換言すれば『川柳』なる文學としての個性だつた。俳句のそれに於けるが如く、芭蕉の個性、蕪村の個性等、個人としての個性ではない。宣なる哉。彼等は彼等の作品に署名を必要としなかつた。事實吳陵軒可有編むころの柳樽初編より二十四編あたりまでの、我等が古川柳の寶典となすものには、句主の名が一つも記されてゐない。而して作者名が明かにされ出した頃より漸く川柳は、川柳としての個性を捨て、狂句に移つて行つてゐる。

實にや古川柳は、寶曆明和安永天明期

の江戸市民の個性の現れたつた。ひいては爛熟期にあつた江戸そのものの個性でもあつた。

○

かくの如き古川柳の姿を借りた明治、大正、昭和の川柳が、その時代々々の空氣を世態を如實に描き出してゐる點に異存はない。勿論俳句や他の詩歌に對して『川柳』としての個性（作家としての個性ではない）を、發揮してゐる點をも認めるのに吝かではない。併し單にそれだけならば、川柳の製作者は必要であつても、句主の何人であるかは、いさゝかも必要としないわけだ。穿鑿に直しないわけだ。

純傳統の世界に安住して、何等の悩みをも抱かない人々の作品を掻き集めて、作者名を作品を如何に入れ換へて眺めても（Aの作者へBの作品を持つてきてても）何等の矛盾も痛痒も感じられない様な

現状ならば（本人にまつては大いに不都合であるかも知れぬが、鑑賞者の立場からみて）須らくさつぱりこそその作品への署名を捨て、仕舞つたらいいだらうと思ふ。古川柳の作者達のそのやうに。

○

併しこの人達は云ふだらう。我々の作品にも、個人としての（單に川柳としてのみでなく）個性がある。この句を觀よこの句にはAでなければ云へない境地がある。次にこの句はB調の代表作だ。更にこの句を觀よ。これは自分の心からの述懐だ。決して他人のものではあり得ない。等々。

だが待つて下さい。古川柳の境地から一步も進み得ない、若しくは進まうとしない人々の作品に在る程度の個性（個人的）ならば、何れその川柳に求めるまでもないことだ。

例へば同一種類の釜にでも、夫々その

釜特有の個性がある。同一の鑄型で、同じ金屬を引ひ、同一の手で鑄造しても仔細に點檢すれば、かすり疵一つ、凹凸一つ、何等かの相違がある。更に本質的に云つても、その釜で飯を炊く場合、水加減火加減に夫々手加減が違ふ。即ち個々の釜の持つ個性だ。その程度の個性に過ぎない個性なら、いやしくも川柳詩人が自分の個性でござるを誇るには當るまい。

○ また或る人は云ふだらう。我々の川柳は姿のみを真似た古川柳の複製品ではなく、彼の精神を承け繼いだものであること。古川柳の精神とは？

彼等は尖つた官能の奥に、都會人の實質である機智を藏して、一切の悲劇喜劇を冷たい洒落、茶番の中に押しこめてゐたが、遂に彼等は時代の尖端をゆく思想家ではあり得なかつた……時代の土が思

想を培ふのに適しなかつたことは云へ……

又總てをかりのまゝに受け入れて、感動の涙を流す感傷家でもなかつた。江戸人特有の通氣氣質を發揮して、江戸人相互の間では何の註釋なしに、彼等自身の詩として會得了解される江戸市井生活の一種の樂屋落……それが即ち彼等の川柳であつた。

彼等は遂に機智の人であつた。それがいいか悪いかは、俄に斷定出来ない。只昭和の川柳家としての私は、單に古川柳の精神を學んで、それより一歩も出ない境地には、安住し得られないことだけは誰かである。

○ 以上私の言ふ所は暴論であつたかも知れない。併し私もまた明日の川柳のために苦しんでゐる一人であることを申添へたい。

横 着

福田山雨樓

横着は悪い事である。してはならぬことである。するいことである。わるいことである。可能不可能その中間で居眠りをするこである。

横着の横面にはまだく泥を塗つてやらねばならぬ。やい！横着！貴様は！

セコンドのぬすつこ、まけたアイスクリン、のびたうさん、泡の出ぬビール。鼻くその丸藥、塵箱をあふれたゴミ、またある……意志のムシ歯、無表情の罐詰、催促性麻痺狂、不作爲犯罪者、睡魔性門番、後退性ヤモキ屋、落伍性ランナー、不生産的浪費者、くさいがうんこ聞かせてやる。お前は欠伸の前科者だぞ。

不起訴の現行犯人！

いつも汽車に乗り遅れてるぢやあないか

× × ×

我が國民は島國的根性をもち、兎角引

つまみ思案に落入り易く、奮闘努力の精神に乏しく、遊惰安逸に流れる傾きがある。(先日圖らずも或る試験官として臨んだ國語の試験問題の一節)

これだ、これが前の百萬言を雄辯に裏書してくれてゐる。しかも慎重に考へさせてゐる。のみならず日本人のうちの。〇〇三%にも足らぬ川柳人に、何ぞ云ふ眞面目な痛棒をくらはしてゐるこそぞけに横着病は笑はれもせぬ不快な事實だ贅澤な存在だ。

云ふことを全國川柳家の何千分の一かに相當する僕が、熱い灸をすゐられたやうに痛感した。

川柳人は恵まれてゐるのだ。爲めに苦勞が足りないのだ。その進歩の遅々たるのは各自が横着であるためだ。次第に横着になるためだ。皆の氣が揃つても居ないせいもあるが、この横着云ふ恐るべき傳染病をめぐが防疫し、豫防し、

撲滅せしめたならば、され程川柳の明日へ齎すことの多いかを考へたいものだ。横着は川柳を殺す。

川柳は横着に負けてはならない。敢て一面觀依而如件 (四九一二)

見たまゝ、

高橋 かほる

天王寺のセメンの菓子賣行が思はしく無いのか、商賣勉強がいつもの彼ののん氣さうな賣り手の後からのり屋のおばんの様な地弾きを連れてゐました……

川柳から見た現代風景

出口 雨 町

(一)

大正の末期から現代へかけてモダンガール云ふ一種の女性が発生し、それがウエートレスにダンサーに或ひはキネマガールにタイピストに又最近に到つてはマネキンガールにステツキガールに等

々様々の姿で街頭やビルデングや歡樂境に現れいわれる憂國の士をしてその心膽を寒からしめた。風來子の句に

辭書にない言葉を都會生んで行き、

彼女等は一世いに封建的家族制度に反逆し男性から解放されよう努力する。

即ち叙上の如き職業を持つことによつて先づ經濟的獨立を企てたのである。この

ことは遂に川柳子雨月をして……

マネキンの何んのミ女得は得

てな句を吐かし又筆者雨町にも……

女にはなんほどもある生きる道

なごさうらやましがらせたのである。ミころがその結果は皮肉にも金權の奴隷となり男性に征服されてゐる。云ふまでもなく生活に疲れた男性を慰めるべく『エロティックに』が彼女らここに女給やステツキの技巧であり美貌が唯一の資本だつたからである。

ウエートレス支那へ行こうかなと思ひ

大阪での収入も彼女の虚榮を満たすにはのまりに少すぎるのだ。そうしたことからふみ上海やハルビンの魔窟に憧れを抱きつみには、デカダンな最もデスバレートな生活が彼女の小さい理性をマヒさせて終ふのである。こゝでも依然として資本主義的道德が優勢である。

(二)

東狂子の句に……

マネキンはさらされるのに飾りたて
ミ云ふのがあるが、實際その出發の當初に於いては極左傾的な『ノラ』であつた處のモガの中から『生ける人形』マネキンが出現したミ云ふこゝも皮肉ミ云へば皮肉だ。

(三)

ある英國の探險家がアフリカ土人をロンドンの眞只中につれて来てそこで一番強く感じたことを尋ねた所が彼蠻人の答へは『誰も彼れもが急がしそうに走り廻

つてゐるのが不思議でならない』ミ云ふのであつた。方に現代科學文明の最も痛いところを突いた言葉ではないか。これは只にロンドンに限らず、我等が都市大阪や東京の問題でもある。

さればこそバネ仕掛けの機械のやうに踊る交通巡査ミ云ふのが必要なのである。吐句坊の句に……

交叉點巡査たび／＼向きをかへ

ミ云ふのがある。決して／＼笑ひごこではない。

(四)

かつてはモダンガールミ云ふ長い言葉
をモガに迄切り詰めた處の時代のテンポは今又、女中上りのウエートレスに墾利彦あたりの著書らしいものを持たせて速成のマルクス・ガールを産み出しつゝある、無鬼の……

前身は語りこむない蝶々なり

はそこらの偽善者を巧みに冷かしてゐる

自分がかいつか讀んだ戯曲の中に、こんな科白があつた。『あるブルジョアのお坊つちやんがね、すっかり左傾したんだそうだが、ミころがそう云ふ人々の集まりには、わざ／＼油染みた菜ッ葉服を着て出掛けて、夜になればタキシードにエナメル靴でも穿いて、自家用の自動車を買らせてダンスホールに行くつて云ふことだよ。現代の世相の一面を現はした代表的なカルカチュアだね』。そしてこれと同じやうなことを沐天は次のやうにカットしてゐる。

カフェで飲んで唄ふてマルキスト
さきのマルクス、ガールミ云ひこゝのマルキストミ云ひ立派なイミテーションミしての存在ではないか。あつて現代を人絹文明ミ言ふこゝも過言ではあるまい。

かれら

石田 沐天

いーさーよう……

いーさーよう……

『おーい落したらあかんで……あんばい受けや』

『わかつてるくサアお投り召されい』

『ようし来た投るぞ……それ……』

『はーんぎつてこしよつこ』

受けたのは他でもない一寸圓の六尺近い金挺の梵天であつた。

東海道石部から草津までの間に於る夏の朝、バックは三上の山麓しく紫雲

の中へニヨツキ頭を覗かせ、陽はほのかに彼等の影を滑らかに流して居る頃、

土方電工等十数人、草鞋ゴム靴地下足袋の連中が今武者行列の真最中……

『おーいそんなふらくして投るなよ厄

ないがな……』

『ようーはまつたー』

金挺が水煙を上げて海へ落ちたのだ。旨く重心を探れないミ投受全く至難の品物、トップを切つて居る連中は磨ひ棒や

もつかう等を投つたり引摺つたり仕乍ら

『したにくの』聲高く

『いーさーようく』

字の朝々を破る響聲一村童らが何事ならんミ駆つて来る。自轉車の女教員がお

辭儀をして逃ける様に走つて行く。

磨ひ棒の秋水五尺にして手拭の留己

れの生命を日毎に托してゐる五分圓のロ

ープ等を背負つた連中が、御道具持ちミ

謂つた足取りで進む……人夫の鮮人がス

コップをザリくミ引摺りながら浅黒い

微笑で隨行して来る。真ん中にフンぞり

返つて居る大名格の法被は通稱『法華の

安公』で、此案の提唱者であり五十を越

ゐた良いおつさんタオルの丁ん髷がする

くミ落ちやうミしてゐる……

いーさーよう……いーさーよう……ミ

砂煙を蹴つて行く……

彼等は今、旅舎の農家を出て約一里の

現場へ向つて出勤の途上なのである。

○

かくて江州特有の大螢が彼等をツウミ掠めて行く頃、辨當空を叩き安來節や江州音頭にもなつて旅舎へミ急ぐ……

そして星の夜を螢の尾光にも似たる儂い戀を流る……

最後に彼らが組ミ共に引揚る日、淡い戀をサラリミ捨て、草津の街に出て、彼

の『うばの茶屋』の床凡に、その小さな餅を頼りなさそうにはくついて居る一團

であつたのである……

川柳のいりやく

木村晃卓

もう之が底かと思へばまだ底がある。

ミこが底ミも知れぬ貧しさの中に獨座行末を思ひ煩ふ時ふミ川柳の一語に逢ふ。

其をまごめるための苦心で今迄の煩はしさにあミ形もなく消れて一句が生れる勿

論句は煩はしさが後形もなく立ち消れたその煩はしさの現はれである事が一層に

嬉しく今日の日が暮る。

私の神經衰弱が快癒の期に達したのも
川柳のおかげだと思つて居る 旁よりや
くに感謝するゆゑである。

霧

横山勝二

停車場から十八里奥の山の中の百戸ば
かりの寒村に親も無い女房も無い子も無
い一人ぼつちが、一階の八疊間に寝轉ん
でる。まだそんな年でもないが、もう世
の中にさまで執着も無く、いつも同じ色
に青い杉山を見つめて居る。

何もかも仕盡して来て強う生き
しかし矢張り人間だ。諦めて居ても未
練は有る。暑い日はアイスクリームも飲
みたい。時には中座の芝居も見たくなる
色んな欲望がもくもく頭を上げる。華
やかな人情や都會を空想する。それが川
柳を形を變へて字になる時、何さもう云へ
ない淋しさを感じる。山にはもう薄く夕

方の霧がかかる。

アノ娘

朝田新水

長野へ葡萄酒に行つた歸路時間が早か
つた爲道明寺で下車した。腹一パイ喰べ
た葡萄酒も飯を喰べてないのに空腹を感じ
て來た。道明寺餅が本家名物さ娘の聲に
振りかへる。この邊りも日和續きで大變
な砂ほこり、その中には牛馬の糞の乾い
たのも混ちつて立ち揚がる店の硝子棚ま
でも砂餅でも振りかけた様に懸つてゐる
道理で娘さんも眞つ白けになつてゐる。
『コレ冗談ぢやない。あれは白粉だよ』
アハハア……君をからかふのも面白
かつた。併しあの別嬪な娘さんが居るに
してもごうも喰べる氣になれず二人は玉
手山遊園に入る。奥へくく喘ぎく道
もない所まで行つたに汗ビツシヨリ、今
はあの娘の家に置かれてあつたほこりま
みれのラムネが戀しい。娘も戀しいのだ

らうご笑ひ合ふ。眺望のよい所まで引返
すアノ娘の家も見へるさ茶店のラムネ
も飲ますアノ娘の家に來る。顔まで洗は
して貰ひ、ラムネ瓶も洗つて持つて來た
には感心、おはぎも洗つて貰つたら衛生
によからうに！

靈柩車

上田柳影

地上七十尺のバルコニー
私はそのきりたつた壁に足を垂れて座つ
てゐた。

足下六十三尺か、道をあらく人の眞上
から見た面白さ、馬鹿め、優越心が顔を
もたける。

ブルーウーブルー自動車、
何けなく見た。

一臺の綺麗な銀色の靈柩車、淋しい車、
そして五六臺の悲しい車悲しい行列だ。
私の足の下をつましやかに通らんす
る。私は私の純情（？）から思はず足を

引きこめて固いコンクリートの屋根をふんだ直立した……。そして何時か亦私がのるであろう靈柩車に軽く頭を下けたのである。私の心が七十尺下の地上へ靈柩車へミミしたか、私はしらない。只青い煙をのこして町の角を葬儀所の方へ靈柩車が消へて行つた。

女の子

蛭子生

子供のない家庭には、突發の笑ひはないものだ。お互に年寄るミアラが目につくから、無口にして居るのが無事である。殊に自分は野狐禪趣味、ユイマの默たなきこ、一日でも二日でも口きかぬは、珍らしくもない。

×

お隣は長幼九人、一番小さい女の子が「おばちゃん、天井から柿をこりに來てヨ」。向ふの鮮人の小供が屋根つたひに柿をこりにくる。一つもいでは、屋根こ

塀の間に、顔丈け隠くして尻かくさず、女の子はまだ屋根こい言葉を知らないが、天井はかなり面白い表現ではないか。諸の楊貴妃には「上碧落下黄泉まで尋ね申せども」こある天井に等しい、笑ひこではない。

吉原に居るに碧落まで尋ね

があつた。

その女の子が

「おばちゃん、雀が煙の種をたべてヨ」
丁度煙を打つて大根種を蒔いたのであつた、いくつも雀がきてつついて居る、そのうちに、
「おばちゃん、雀を追つてやる」煙中か
け廻つて踏み荒してしまつた。大根の芽
はいつ迄たつても出ぬ。

種屋が古いのを、賣つたのだらう。
蒔き直すこにした。

ハイエストルーム

楊井二南

「コレラ來る」のポスターに虎が描いてある。ベストに鼠は附物だがコレラに虎は變てこである。コレラは虎列刺ミ書くそれから虎の様に猛威を振ふミ云ふので虎が描いてあるらしい。日本人なればこそそれで満足出来る。若し西洋人が此の説明を聞いたなら日本人なんて随分出鱈目な野郎だと思ふかも知れない。

×

松竹座の二階へ上る。馬鹿に女客の多い日である。右も左も後も婦人の顔で頭である。スクリーンのタイトルが消れて電燈がバツミこもる。忽ちボーイがやつて來て「こゝは婦人席ですよ」ミ云ふ。道理で女が多、ミ思つた。あわてゝ退去命令に従つて男子席におほしき所に席を變へる。所が豈圖らんや此處にも、所謂淑女諸君が點在してゐる。而もボーイは之等に對して何等の撤去命令をも發しない。明に日本も何時の間には女尊男

卑になつてゐるのである。

×

私の銀行の人の家庭でこんな事件があつた。夜中に妻君が起こすので目を覺す。鼻をつく異様な臭氣に包まれてゐた。次の瞬間それが瓦斯であることに氣がついた。彼は突差に夫に感付いて臺所に走つた。そこに彼はいとも恐ろしき事實を見出して卒倒せんばかりに驚いたのである。瓦斯の栓がゆるんでゐるのであらう。無氣味な音と共に猛烈な勢で瓦斯が漏れてゐる。臺所一帯は濃厚な瓦斯が漲つて若し一分間でも鼻をふさがずに居ればそれこそ最後だ云ふ程になつてゐた。幸ひ奥の間までには障子が二つあつたので其處は未だ稀薄な瓦斯であつた。栓を戻すやうに戸を繰るやうに騒動やつたのは勿論である。彼は危ふく窒息しかけた幼児を抱いて午前二時の巷へ避難したこの事。この發見がも一時間でも遅かつたら

或は又何か火の氣でもあつたら……と思ふ。私は慄然とした。『それはよい命拾ひをしたね』と喜びを云つたつもりであつたが彼の答へは貧弱だつた。『何しろ月末の瓦斯代がたまらんよ』劍柳庵にて

クロームの指輪

丸山 公二

椿の花が落ちるやうに、當然彼等二人の戀に破綻が來ました。彼女は哀別に泣きむせび乍ら震へる手先で淋しく光つてゐる。無名指の指輪を抜いてせめて樂しかつた思ひ出のシンボルとして彼に與へました。それはく價格三十錢のクロームの指輪でしたので、流石彼も啞然として嗚咽する彼女に何のなぐさめの言葉もかけず指輪を置いたまゝ、後をも見ずに去りました彼のした戀、それはクロームの指輪代位のものでした。四、九、七日

(十三頁よりの續き)

障子に小さい穴がぽつん／＼とあいてゐる。一枚づつ斜めに手に支へてゆく。障子の裏にべろんと尾の下つた尻が餘つてゐて、表に小さい鋭い顔を出して居る。

『ゐる、ゐる』こいふ聲に妻も入つて來た。

『逃かしてやらうか』

私は鼠のために随分被害を被つてゐるがそんなに鼠をにくめない質である。書いてあつた、一文が頭の中ではたらいてゐる。

『殺してしまひなさいよ』とまだ川柳漫談を讀んで居ない妻の返辭は簡單である。『殺さうかな』簡單な言葉にも、案外魅力がある。そして審を取りに行かう。妻が細目に開けた隙間から、小さい脱兎は一目散に庭へ逃げ去つた。

二日置いて、朝、誰れか玄關先の堀の屋根へ一月ばかりの子猫を置き捨て、いつたのは、何ういふ因果律の操りか判らない。



各地柳壇

川柳雜誌社 柳珍堂忌

九月七日夜

於端の坊

本社恒例の四大忌句會の一、柳珍堂忌を初秋七日の夜催した。席上路郎主幹より故人を偲ぶ句會を催す意義は、故人を追憶するのみでなく、その忌を通じて眞面目に我等の生きるべき川柳について靜に考へる日としたい、といふ冒頭の許に「川柳と人生」の問題について有益なる講話があつた。

當夜は本社、舊同人、輝翠、芳穂の二氏が、久し振りに來會され、京都神戸よりの出席者も多く盛會裡に散會（二柳子記）

（參會者）路郎主幹、苦笑、迷雨、青芽、紫電、素峰、靈太、一杉、里十九、琴人、起照、公二、三子平、潮多浪、たけし、魚頭、芳穂、千春、鮎美、村樂、英郎、陽喜亭、新水、凡句郎、夢角、大紅かほる、觀月、四五磨、山雨樓、紫明、柳影、長平、山月、金喜、椿雨、遠志、強風、瓢山、黑天子、杏三、さだを、素人、武子、突支坊、黃蛾、青果

春波、助六、孤愁、嶺月、鶴峯、内匠守、紋太、悟郎、貴山、好古、輝翠、ひろし、精一、萬よし、三笑、二柳子

兼題 米

萬よし 選

米をとぐここに馴れてる仲居の子
葬式へ米屋突嗟に持つてくる
米櫃の新らへ貸賣斷られ
夜店出し米買ふさ云ふ愚痴に馴れ
國からの米當然と思つて居
米屋まで食へないさ云つてゐる
米の子もちゃん米の値知つて
米賣つてからと百姓は子を叱り
托鉢へ見本のような米をあげ
百姓は他人に食はれる米を積み
風呂敷の米へビュウッ風が鳴り
米代は知れたものだと言ふ暮し
旦那さんだけ半搗を召上り
シヤム米を喰つて創作續けてる
緑日の乞食米から錢を掘り
米代に追はれ幸ひ達者なり

村 芦 素 琴 紫 迷 靈 山 内 一 貴 紋 鮎
樂 穂 人 人 笑 明 雨 太 月 匠 杉 山 太 美

助定日元氣に肩へ二斗袋
半搗の七分搗のとやせてゐる
米粒は數へられないものに出來
賣り上げの中から米にして戻り
支那米を食つて支那人平氣なり
里からのたふりに米の出來も書き
穀象は自分の物のやうに喰ひ
鳩にやる米を包んで乳母車
米の値を尋ねる子併叱りつけ
高盛りにして借りた米返へすなり
氣の毒と思へど米屋へ借が出來
まだある（ガシ）計る米の音
米の値を妻に聞いてる暇な事
（佳）船世帯今日米を買ふ土を踏み
（佳）裏日本仁川米と共に着き
（佳）お洗米が利いたやうと思ふ也
（佳）病む父へすまな様に米が切れ
（佳）混りけは無いと米屋の一握り
（人）夕焼は米洗ふ間に消えてゐる
（天）鶏に拾はる米となりけり
（地）米代が出來ればさ云ふ力添へ
（軸）胚芽米これが儲かるとは書き
席題 手荷物

手荷物を驛夫責任なく投げる
手荷物もなく改札をくぐるなり
手荷物が二本の指にくるまつて
手荷物がなければ降りて見たい
手荷物が出來てみんなさきで見る
手荷物は赤帽を呼ぶ顔で立ち
引つたくる様に手荷物持つてくれ

突 杏 素 助 素 凡 一 遠 青 精 黃 一 觀
支 三 蜂 六 じ 句 杉 志 芽 蛾 杉 月
坊 三 峰 し し 郎 太 選 月

嶺素月 新水穂 三子平 陽喜亭 武子 杏 明選 素人 黄蛾 きたな 泰三 鮎美 貴山 杏角 麥三 凡句郎 公二 新水 黒天子 同 陽喜亭 同 三笑 同 ひろし 同 琴人 同 三子平

獨身の針持つ度に考へる 陽喜亭
 皆んな寝る頃に獨身下駄をはき 公二
 街路樹の落葉を踏んで一人者 たけし
 圓タクに獨身黨が乗つて行く 紫明
 獨身へ階下の女房の氣が輕く 同
 何させて見ての器用二人住み 村樂
 獨身の未だ肩の凝り知りもせず 同
 獨身は今日玉突にあるのなり 里十九
 二階貸しします獨身お断り 同
 獨身がよいとこでありわるいこ 同
 獨り身を師匠案じてゐてくれる 新水
 獨身の夢には狭い二階借 同
 泊るにもあらず獨身くだなまき 杏三
 獨身につら當てのよな荷が續き 同
 もうのめ酒を獨身の人でゐる 鮎美
 灰皿へなやみをすてる獨り者 同
 獨身の五圓ぐらひは持つてゐる かほろ
 獨身の問はれただけを云ふて去に 同
 獨身の夜中に少し腹がへり 夢人
 獨身の淋しくなつて髪を梳き 同

川柳雜誌部 素人氏歡迎句會(大阪)

八月廿四日夜 於端の坊 松盛年報
 松山に在る岩本素人夫妻が暑中暇休で來阪
 されたので、その歡迎句會を開催した。素人
 氏は不相變老來益々元氣で一場の挨拶をさ
 れた。殘暑の折柄にも抱らず四十五名の來會
 者を得て盛會であつた。幹事の萬よし旅行
 中でまことにすまなかつた。

席題 滿員 素人選 助六
 滿員を見て太夫元は酔ふて居る

滿員をこぼれぬ様に巡查居る 眞平
 はみ出したまゝで滿員發車する 凡句郎
 滿員車故障なか／＼はかどらず ひろし
 滿員で財布臍まで下つてき 三子平
 滿員は押されて居ればいゝのなり 小六
 滿員に爪切無駄になり 貴山
 滿員へ特等席はコンバクト 壽枝女
 滿員のせめて力士の顔見度く 新水
 滿員を喫煙室で待つともよし つばき
 滿員車拔手を切つて一人降り 卯生
 滿員は別に臨官席の幅 文愁
 滿員へ女は一度背伸びがする 孤久
 ラツシニアワリー市電損は見えぬ 遠志
 滿員に座長悠々咳一つ 起照
 滿員へやつと乗つたが下駄落し 同
 滿員の車掌すげなく締めたまゝ 四五磨
 滿員の中へ女のあつかまし 同
 千日の紋日は語るだけのはつめ 同
 割引と遅刻へ命がけで のり
 席題 日本人 山雨樓
 日本人死ぬる覺悟は持つて居る 四五磨
 威張らして置けば立派な日本人 千春
 洋服のボタンの光る日本人 武子
 金の値と別に産んでる日本人 杏三
 金を借る事も上手な日本人 梅風
 酒飲めば日本人をあからさま 遠志
 出稼の五年耕地の廣さを見 翠人
 ティーブ切る日本人の小さ過ぎ 苔香壺
 日本人に信用のない日本人 大地
 大使館靜かに君ヶ代が揃ひ 同
 ロンドンに住み澤庵がほしゆなり 同

胸打てばもう安心の日本人 觀月
 その怒り日本人は笑つてゐる 同
 日本人兎に角負けるのが嫌ひ 同
 有りそな顔をしてゐる日本人 同
 日本人派手に喧嘩をしてしまひ 貴山
 日本人東の方を伏し拜み 同
 ビフテキへ日本人の音を立て 同
 日本人六神丸を信じて居る 二南
 (人)日本人偉い人だが背が低し 同
 (地)草に寝る我影小き日本人 新久
 (天)日本人鯛を安く買ふてくる 文
 (軸)日本人もう秋風におごりて 山雨樓
 久選
 よれ／＼に富士を見せる水の影 黄蛾
 どの影もおどけ鏡に笑つてゐる 千春
 影見つめ後れ毛あげる病んでる娘 三子平
 丸窓の影に流しの明けがらす 双葉子
 煙突の影で職工本を讀み 里十九
 ペン先の影へ電燈をつり替へる 觀月
 吸ひつけた館屋は傘をはすにする 助六
 人の影動かす花火消えて行き 杏三
 横町をまわれば一つ影がふえ 英郎
 影に咲く花をいたはり老夫婦 新水
 影一つ夜中の街によく響き 苔香壺
 心配の足元影が長く伸び 遠志
 我が影の頭をふまれまいと 孤愁
 むつして歸れば母の影寂し 柳笑
 魚の影大きく揺れて爽かに 大地
 老いたりな老いたり父の影 觀月
 金魚鉢金魚の影が濡れてゐる 二南
 川向ひ踊りの影の亂れ勝ち 夢角

金屏にうつる煙草の煙の影

(佳)影丸く今夕飯の輪をつくり

(佳)影から延び出て針に糸通り

(佳)不仕合影の大きい家に住み

(佳)子供等は夕日をあとに影く

(佳)わが家の影も小まのびて更け

(佳)氣に入らぬ影が映て止む話し

(佳)影もまた疲れたらしくつい

(佳)ビルヂング平屋冷めたく影

(佳)小さい影大きい影に手をひ

(軸)影法師一つとなりぬ稻の上

席題 庭石 ひろし

庭石へ彼女がどませ一つ撮り

庭石は先祖が踏んだ儘であり

庭石のそこまで下女の許されて

庭石を起せば蛙うづくまり

庭石に蚯蚓は強く生きてゐる

泣きそうな石を玄關脇にすへ

庭石になるを曳く牛またぶたれ

胸下駄を重く庭石から離れ

庭石を歩いて下駄が脱げか

庭石のそこから寫真機を向ける

庭石へ雀の卵ぶつけられ

庭石へそのまゝ忘れた青寫真

庭石に裸の影は猪口を持ち

(軸)庭石の家の値踏みするも秋

席題 案内 琴 人 選

案内へ案内聲を變えてみる

案内を手古摺らしてゐる國なまり

案内をされた座敷で堅くなり

案内に天王寺がひまがり

御案内長い廊下を付いて行き

バルコニー案内人も風を入れ

案内のそれからそれよくしや

案内の時々かはる町に住み

案内の道頓堀でつき當り

御案内さんさんとかたづける

案内をされて淋しい旅の宿

自慢する氣で案内は指をさし

丁重に案内されてうろたへる

(人)鉄おいて道案内に來てくれる

(地)案内は説明のいるところ來る

天案内へしきりに頭下げて居り

軸案内に甚五郎の傘やつと知れ

席題 氷 店 互

氷店また一服に蚊が喰ひ

氷店まづ一錢と云ふ御客

トラツクに黙殺され氷店

氷店濱の景色は暮され氷店

氷店夜店の中に光つて居

氷店馬もバケツで呑んで居

氷店氷まんじゆは後にされ

横町が賑やかな氷店

氷店氷一つに夏の影

雨の日は淋しく氷かく娘

氷店鳥居のかげを借つて出し

氷店隣の女給遊んで居

凡句郎

公二

三子平

四五磨

黄蛾

武六

助子

杏三

つばさ

同

柳笑

同

柳天

沐

柳笑

同

柳天

沐

柳笑

同

柳天

沐

柳笑

同

柳天

沐

柳笑

同

柳天

氷店障子の影に暑くゐる

來年も頼んで閉める氷店

町内でまだ起きてゐる氷店

ハンカチと扇が残る氷店

氷店植木の置場かへてみる

氷店海水浴の顔馴染

氷店ぬれた銅貨の刺銭を出し

川柳 糸屋町句會 (大阪)

雜誌社

五月十九日夜 於實業會館 森本赤城報

舟々、新水の二君が東京へ旅立つて見へない

のが淋しい、雜談の後久し振りに清記互選を

する。

席題 忘れ物 互

持主の若さが遂に取りに來す

愛の巢へ情を籠めた忘れもの

忘れ物無いかさ母はだめを押し

甚敵の勝つて忘れた巻煙草

女房と横町で逢ふ忘れもの

わじとさしたことが羽織にひもが

それゝに眼を引く驛の忘れ物

氣のきいた幹事が知らず忘れ物

忘れ物出來て丁稚は走らされ

ほのかにもうつり香のする忘れ物

毒づいて出た玄關へ忘れ物

終點へ兎に角着いた忘れ物

席題 雜題 互

(一點)切れ過ぎる腕を主人に怖

二三年見ぬ間に妹ふけて見へ

同

源坊

同

かほ

同

新水

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

(二點)父の聲母の聲する初奉公
 淀君へそむいたやうに濠は澄み
 その譯を云ふてはくね姉と母
 (三點)壁落るまゝに長屋で二十年
 明日逢ふにしてもほいはい別れ
 (四點)机からもう喜す智恵も出ず
 淋しさは彼女の過去を知つて寝る

第七回 松山支部例會 (松山)
 川柳雜詩社

御用閑曖昧のへ置いて去に 浅井冷々子報
 曖昧が喧嘩の種になつて来る 清記互選
 曖昧な歳で通す二度の縁 冷々子
 眞剣になると曖昧とあわて 清流
 曖昧な男にされて貯めてある 大鷲
 それがその何んが多い答へぶり 柳樹
 曖昧じや困る仲人腰を据え 水樹
 保険屋はちと曖昧な事を云ひ 時雨樓
 返答は曖昧にして廻り椅子 かし松
 前借へちと曖昧な譯を述べ 巨城
 曖昧な客へ女將はだめを押さ 極光
 曖昧に溺し女は三味を持ち 花之助
 曖昧な返事で叔父は旅に立ち 夢郷
 曖昧な態度を世間承知せず 青帆
 曖昧な様で要領得た男 支々子
 曖昧に答へる別な土産物 同
 眞剣な態度へ何のかんのなり 同
 曖昧な返事でヘンな走らせる 同

曖昧な返事に電話着を立て 同
 曖昧へ面白がつた詮議立て 五健
 冬越の障子へしがみ生きた蠅 大鷲
 はり換へた障子架を待つて居り 冷々子
 長廊下障子へ走馬燈の様 水樹
 手狐を障子に寫しなをあやし 巨城
 よち〜と障子をあてて歩き出し 支々子
 手の届く限り障子は骨を見せ 双葉
 張りかへた障子一筆したくなり 大樓
 おさなしい作法であかねがた障子 一柳
 別荘の障子開けば舟が見え 秋無草
 閉め切つた障子女は硬くなり 柳女
 (佳)押賣を障子の内で亭主聞き 大樓
 (佳)日曜日亭主の用は障子は 五健
 (佳)障子貼かへて壁の古さかな 時雨樓
 (佳)障子貼換えて机も整頓し 極光
 (軸)障子貼る頃店の暇が出来 芳之助
 兼題 マツチ 冷々子
 葉巻吸ふ叔父はマツチを忘れない 子
 可路宿マツチへ巻いた糸を貸し 選
 徳用のマツチを使ふ世帯持ち 青帆
 宣傳のマツチ秋に二つ三つ 破扇
 徳用のマツチ掴んで束ですり 支々子
 用心の奥さんマツチ子に見せず 茫々
 つれ〜に女給はマツチ積み重れ 嘉久馬
 物思ふ火箸で寄せるマツチ殻 夢郷
 マツチ箱重ねて箆箱出来上り 双葉
 エプロン(キヤツチホールで熨す)来 一柳
 煤ぼけたマツチ竈場で振つて見る 水樹
 頂上の一服マツチすりつくし 花之助
 大 花之助 大 柳樹 大 雙葉 大 一柳 大 秋無草 大 柳女 大 大樓 大 五健 大 時雨樓 大 極光 大 芳之助 大 子 大 青帆 大 破扇 大 支々子 大 茫々 大 嘉久馬 大 夢郷 大 雙葉 大 一柳 大 水樹 大 花之助 大 大

是れ切のマツチでや〜燃やし付け
 一本のマツチで二人のつける仲
 君君と煙草喰えてマツチ借り
 此のマツチ何所かで借〜儘と云ひ
 電燈が消えてマツチの置き所
 甲板のマツチは風へ尻を向け
 空抽籤はないがマツチの多い事
 一銭さマツチを屑屋置いて行き
 實驗にマツチをすらす炭酸瓦斯
 摺るマツチへ喰はへ煙管が借〜来
 差し向ひマツチえ煙草かまへてゐ
 外出にマツチの事も女房云ひ
 (佳)よく折れるマツチぢやないし見せ
 (佳)それからマツチない物にする
 (佳)停電に覆洩れ来るマツチの音
 (佳)釣り戻り相續くマツチ濡る居
 (佳)二三本マツチを入れて戻す皿
 (佳)二三本マツチへ小言添へて投げ
 (人)火のマツチに背高ちさ曲がみ
 (地)喫マツチに背高ちさ曲がみ
 (軸)二三本振てマツチ貸しと呉れ
 (軸)日参のマツチ雨中にやつさる

川柳 柳守口支部句會 (大阪)
 雜詩社

九月八日於 双葉子居 石川双葉子報
 兼題 巡 査 素 人 選

白服になつた巡査の肥へて見へ
 ある時は巡査になつて見たいなり
 ゴーストツブはこ〜汗の中で生き
 村巡査やさしく子供あやして
 人民になつて巡査の非番なり
 子守ももう若い巡査の名を覺へ

柳加女 計城 薩城 三雪 眺城 白梅女 時雨樓 大鷲 秋無草 松葉 双葉 芳之助 極光 川路 葭路 大鷲 一柳 かし松 冷々子

活潑な嫁十能にけつまづき
あらあな火の十能の置き所
十能も逆手に持てば恐しい
(秀)釣り銭が出来ず十能貰つとき
キヨシ

席題 聲
もの思ひ聲かけられて赤くなり
ぢき戻れいいつも年らの母の聲
道しるべふさ捨猫の聲を聞き
點呼場大きな聲で賞められる
聲自慢お聲ばれなした聲を張り
大聲一喝怯えまいとする
上官へいきなり太い聲を出し
丸髷のすざしい聲で話して居

席題 肩 書 互
肩書ももう何もない弓の腰
夫の肩書妻のもて遊び
おちぶれてゐても肩書ある親爺
肩書の書けはいくらもありはあり
肩書で来る火事見舞道が開き
肩書へきちんと靴が揃えられ
經濟が持てなくなつた肩書

川柳
維誌社 天満支部句會(大阪)
八月廿五日 北山悟郎報

川風 病んでる母を忘れたり
川風をまじもに受けて女連れ
川風にトンボたかうさび
別れてからの寒い川風
川風にこんなさまで来てしまひ

縁の助 松隠 幸永
縁の助 松隠 幸永
縁の助 松隠 幸永

縁の助 松隠 幸永
縁の助 松隠 幸永
縁の助 松隠 幸永

縁の助 松隠 幸永
縁の助 松隠 幸永
縁の助 松隠 幸永

縁の助 松隠 幸永
縁の助 松隠 幸永
縁の助 松隠 幸永

縁の助 松隠 幸永
縁の助 松隠 幸永
縁の助 松隠 幸永

縁の助 松隠 幸永
縁の助 松隠 幸永
縁の助 松隠 幸永

川風に馳走の一つ西瓜冷え
川風にやゝともすれば唄ひたき
川風に酒の弱きを見させてゐる
花 火 人
もう済んだ花火に二人だけ残り
しばらくは花火にガール休んでゐ
寝ない兒を一そ花火に抱いて出る
屋根近く落ちる花火へ皆氣付き
大空に碎ける花火涼しそう
花火など知らない様に盆踊り
戀人を乗せて花火を遠く見る
ホストまで行くさ花火があがつる
(軸)晝花火煙草のむりほごに見え

大阪に店ありドライブして歸へり
遠乗を小學生は除けてくれ
遠乗りに女給の方は馴れて居る
遠乗は線路にそうて夢青し
遠乗の相談丁雅同志なり
ドライブにもうだいいく色がざざ
遠乗のゆつくり踏んで雨に會ひ
遠乗は汗臭い手に花輪持ち
遠乗の涼しく汗をかいてゐる
馬の背に月をちかゝる遠乗
遠乗の馬は涼しく休んでゐる

川柳
維誌社 糸屋町句會(大阪)
六月二十日夜 於實業會館 川合舟々報

翠峯君が退院後始めて顔を見せて呉れた。か
ほるさんさも久々だ。
席題 象 互 選

この村へサーカスが来る象が来る
これでまだ子供が象の人氣なり
園丁に聞けばお嬢さんさ云ふ象
園長は象も我子のやうに云ひ
からかきのさばり象は奥に居る
喜こんでゐるらしい象の牙
辛き様に象は鎖の音をさせ
出くの如くに象は引出され
つれづれに象は背中へ藁を上げ

石段の上から下へ何か云ひ
石段の方へ木の葉が散つて行き
石段の白さは瀧のやうに見へ
石段に腰を下した病み上り
石段の高さ數へて上がるなり
石段を上るに父は負けてやり
石段を登るにつれて海が見へ
石段の下りはトビさげてゐる
石段の中ばに帽子飛ばすなり
かす讀んでいく石段の長い事
高い石段雲が出てゐる
石段をおるはんらしく下りて来る

旅役者蚊を追ひ乍らくぐくなり
旅役者顔の小しわが淋しそう
旅役者鎮守の森へ影になり
貰ひ風呂して旅役者ほれられ
本宅は二階借りなる旅役者
旅役者帽子の鏢を垂れて着き
甲斐のない町さ科白の氣が抜ける
寺小屋で千役が足らぬ旅役者

翠峯 新水 小六 双葉子
翠峯 新水 小六 双葉子
翠峯 新水 小六 双葉子

翠峯 新水 小六 双葉子
翠峯 新水 小六 双葉子
翠峯 新水 小六 双葉子

翠峯 新水 小六 双葉子
翠峯 新水 小六 双葉子
翠峯 新水 小六 双葉子

翠峯 新水 小六 双葉子
翠峯 新水 小六 双葉子
翠峯 新水 小六 双葉子

簡單に名刺を出した初対面
 初対面海に向つて静かなり
 初対面親子の顔をあきれて
 初対面氣やすくすんで笑ひあひ
 初対面足にとびがきてくる
 二人共お酒がける初対面
 弟をよろしくたのむ初対面
 初対面いつこに汗を拭いてゐる
 初対面妙に神經質になり
 初対面眞上に金魚浮いてゐる
 兼題 花屋 美 選
 今朝の雪花屋の門は掃いてあり
 花賣りの花はきれいに雨に濡れ
 公設へきて花屋にも用があり
 お得意の門をよこして花屋去に
 お見舞の道で花屋へ寄つて行き
 一枝をあとからそつと添へてくれ
 姉妹が仲よく花屋から戻り
 満開の花を花屋は賣つてゐる
 花屋から肥料のこさを聞いて去に
 (人)自轉車で走る花屋の朝の呼吸
 (地)手傳ふてゐるは花屋の庭で
 (天)夕刊を讀む暇もなく花屋寢る
 (軸)親も子も養子も花屋よく動き
 やよくつて花屋は奥で聲がする
 同 美 選
 里十九 石竹 同 健坊 同 觀月 同 美 選
 川柳 平塚支部句會(神奈) 酒井駒人報
 維誌社(川縣)

七月七日夜美知坊居て支部同人の句會を開
 催した。そして今後の運動、支部の維持等に
 つて相談をしました。

生活のため演壇へ女工立ち
 割引の木戸へ明るい母の顔
 生活になやむ思案に灯がともり
 檢束をしたが同じ生活難
 (佳)貧乏で暮す軒の低いこま
 (軸)名門をすて、路次の奥に住み
 席題 足 笑童 選
 片足はぶつくり松葉杖突く娘
 片足を取られて麻裏縫いつけ
 賣られて行く女に見る細い足
 席題 路次 美知坊 選
 路次来れば雨に赤蟹這ふてゐる
 泣いた子さ叱られた子さ路次で逢い
 衛生屋路次裏で晝の茶を貰い
 席題 青年 城月 選
 道普請青年團の杭が立ち
 踏切へ青年團も出る騒ぎ
 經驗の涙で若者を意見する
 席題 初 共 選
 脱衣場をこぼした濱に秋を知り
 初物を母佛壇へ上げに立ち
 初戀に破れて船に乗りつけ
 川柳維誌社 第七回例会(大阪) 御旅支部
 九月一日 於高津梅之家 櫻井圓角報
 兼題 秋 口 路 郎 選
 墓参り子は薄の穂抜いて見せ
 秋が来たさて仲人のやつて来る
 多 郎 角

水道の水にも秋の宿つてゐる
 秋口の雲の去来をちつと見て
 風鈴のきざになりたり秋の口
 黒い子になつたを母に迎えられ
 熱燗も一寸さいいねさ虫の聲
 山登り青さひひらへ汗をふき
 大空の青さの中に秋を知る
 納涼のピラを殘して秋に入る
 驟の秋矢張り都會の方がよい
 目の凹み秋口待ち甲斐もなく
 蚊も名殘思ふ存分喰つてゆけ
 末なりの南瓜の値さへ高くなり
 (人)裾捌きもう秋口の軽さなり
 (地)おに子に風邪を言ひ初め
 (天)萩咲いて簞笥の輕さ手に應へ
 席題 置去り 路 郎 選
 虫籠に死んだまんまで置き去られ
 相談に言ふだけ言ふと主人去に
 置去りへ幹事怒から合圖をし
 置去りしあの妓が一寸氣にかへり
 宿替へに猫の瘦せたを置いて行き
 置去りにきかれた其夜のエピソード
 置去られチヤンはへに母こまり
 置去られ氣付い時は空行季
 置去りになつたもあてゐるなり
 (軸)床もない部屋へ置去り移さる
 席題 行 末 路 郎 選
 行末は夫婦さ聞いて嫌ひ出し
 行末を旦那へ念に念を入れ
 行末を樂しむ親の氣が知れず
 行末をみつめて無駄をせず
 圓 路 翠 夢 角 鳥 夢 緒 鳥 夢 月 夢

青砂郎 貴輪 一杉 萬年青 多聞 彩峯 同 青砂郎 一路郎 同 選 萬年青 飄山 飄樓 黑天子 多聞 青砂郎 一路郎 同 選 多聞 青砂郎 貴年青 貴年杉 黑天子

同路貴同朝黑青瓢多五臨選路一萬貴朝彩青多蛙同路黑同五同彩朝
郎山陽天子樓輪海郎彬山陽峯郎聞水郎天子輪峯陽

スレヒ
タヤミ
持の二階

若水に十九の春の笑ひ聲 青帆
 酔醒の水を棒げて来る禿 同
 京染屋おほめの言葉水へ別け 一柳
 挨拶は水の馳走が済んでから 吐詩坊
 打水に少しざばつく客ある日 烏城
 薬局は水に勿鉢つけて盛り 吐詩坊
 隣り迄来て引き返す撒水車 句浪人
 水害の後は淋しい視察員 川の字
 打水へ水鐵砲が加勢に來 壺雪
 (軸)水臭いなあさ大石怒らせる 鐵傘樓
 V漫談「何を求めますか」五健「川柳昔ばなし」
 鐵傘樓「席題」バルコニー「大樓選」女持ち「
 水樹選」氣前「互選等ありて盛況を極む」

かほる居偶會 (大阪)

八月廿四日

高橋かほる報

厚化粧

厚化粧今日もてぶらで歸つて來 二南
 燭番へ小面の憎い厚化粧 同
 厚化粧帯にはさんだ物がなし かほる
 厚化粧よい座蒲團へ座らされ 同

敵打

敵討夜逃げの様に家を出る 二南
 殿様に遠く本懐遂げてゐる 同
 昨日より刀が軽い敵討 かほる
 敵討身ざれひにして明日を待ち 同

翠夢居偶會 (大阪)

九月五日夜

櫻井圓角報

席題 明け、鹽

互選

夜明しの座敷藝妓は飲んで居る 翠夢
 明け方にやつと話のけりがつき 多郎
 明けがたに歸れば妻の座つて居 同
 酔ふたゝゝ鶏の聲まで知つてゐる 圓角
 曉の六根清淨雲の海 同
 鹽田はいと淋しくも雨にくれ 翠夢
 鹽の利いてない様な愚痴をきき 多郎
 好物のうごん國のは鹽辛く 圓角

松番小集 (松江)

八月二十四日

席題 若き日

穗波

選

うしろ指さされた若き日が戀し 子の字
 若き日の妻に一物あつた事 大鳥
 (人)若き日の嬉れし赤い灯が 三雷波
 (地)若き日に試練の様な戀敵 大鳥
 (天)若き日をあたらし過した南湖院 可明
 席題 順番 雪緒 舞姫 緒選
 胸白が来て順番を狂はせる 舞姫
 同病を順番の間に話し合ひ 穂波
 そこ迄は順が来て居る失職者 可明
 順番も無く妹に縁が有る 三雷波
 (人)順番の後いきなり肩を押し 大鳥
 (地)順番の様に大工は釘を打ち 三雷波
 (天)順番に酔ふた振りした隠し藝 可明

住吉即興 (大阪)

九月一日夜

生田翠夢報

流連の飯炊きに去ぬ藝者も居路郎

惚れてほし惚れてくれる若き身は 圓角
 流連寒う藝妓からもうあきらまれる 翠夢
 第廿 南海至誠川柳會 (大阪)
 二回 九月九日夕 竹内多聞報

三年目

路郎選

三年目三年目には子を儲け 内村
 失禮に三年さいふ永き日よ 五輪
 大都會三年夢のやうにたち 同
 三年目殖へたは子供一人丈け 萬兩
 三年目水白粉と成つた妻 青砂郎
 三年目ですさ女中はよく肥り 萬年青

質屋

路郎選

轢死体質屋札まで書かれてる 内村
 質屋をば草笥の様に思ふてゐる 同
 人のもの何でも安く見る質屋 同
 厄介のやうに質屋は立つてくれ 多聞
 斷髪は質屋の娘さは見えず 一杉
 質屋の朝の濡れてゐる庭 貴山
 來てみれば質屋の素戸の輕う開き 貴山
 質屋出る貞女の顔は淋しふて 綠風
 質屋から出るさうしろの風が吹き 多聞
 (五客置き馴れて質屋の納簾輕は 萬年青
 まだ帯をさけと質屋へ走るなり 貴山
 スリパンに質屋の亭主うろたへる 五輪
 其使途を質屋も知つて苦笑ひ 萬年青
 入り替へて子供に着せるお正月 千尺
 (人)質屋から借りた友情とは知る 一杉

(地) 緻くちやの札を握て質屋出る
(天) 質屋今女房のやうになつてむぢ
(軸) 人生は暗し質屋の暖簾めき

指環 互

わたしてもあるさ子供は指を見せ
指環でもぬけと男の無理に泣き
國許へ指環の数をさして去に
サツク父が残る指環の愚痴が出る
兎も角も指環をかたに二圓借り
エンゲエジリソグ給仕にぬかれる
死んで行く人に指環の光りすぎ
羨むは指環ばかりで無いのなり
言譯も指環をいぢりする
うれしさと怖しさの指環にて

賣動 互

拔打に賣動さいふ荒療治
勳三等を買へり國土を賣りかねず
髭生やす勳章賣にだまされて
賣動を熱海で聞いてゐる身分
賣動の記事にはあまり縁遠し
勳章も指環のやうに買つて来る
大臣も勳三等も金次第
御大典買ふた勳位も威張つて出
勳章は松屋町にも賣つてます
賣動の買つた方から收容し
賣動の昭和政治に色をつけ

尼崎川柳夏季大會 (尼崎)

於大物村區事務所 今村吉朗報

多 貴 路
關 山 郎

選

瓢 瓢
山 山

一 萬
杉 年

同

貴 貴
山 山

同

路 路
郎 郎

同

同

同

同

選

五 瓢
輪 霞

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

大入に競後は別な氣持ちで居
大部屋に閉場を待つ今日の入
大入に悠々とした下足番
大入に續いて辯士聲がかれ
あきらめて見る大入に風が
大入へお茶子さつと足を入れ
大入のその夜 蠶の桑が切れ
大入の樂屋朝から良い景氣
大入を子役嬉しいものにする
大入にお茶子の聲が荒うなり
大入に下足つたらぬ汗を拭き
大入へ木戸口何かもめてゐる

席題 大 入 互

選

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

悟 吉 萬 琴 破 夢 苦 小 文 孤 陽 街
空 朗 樂 月 竹 路 香 宰 久 舟 喜 外
選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

(天) 手垢もむ一輪差しにあるな
(軸) 生活に逐はれてたまる垢に
席題 負け惜み 文 久

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

破 陽 破
竹 喜 喜
選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

選

席 題 慕 口 琴 月 選

押しつづす様に慕口札を入れ
一文もないと慕口ほり出され
公設から歸りに慕口放つとかれ
慕口のきつちりあはれとどめたり
兎も角も一人へ財布まかされる
腹巻の慕口重う垂れてゐる
慕口の重み帳場で話して居る
慕口を握つて立つた満員車
交番所その慕口を振つて見る
慕口の紐を丁稚はからかはれ
御隠居の慕口にある釣の糸
(佳)慕口を首からかけて乗り過じ
(佳)慕口の中味女に見くびられ
(佳)洗濯の母に慕口教えられ
(佳)慕口を重たう刺錢の蓋で去に
(人)慕口の底吊皮に見拔され
(地)慕口に縫い入れた箸の鍵
(天)慕口を預け簞入り家に居る
(軸)慕口を拾ふさたんに夢がさめ

策 題 記 念 雨 町 選

一周年記念マツチを一つくれ
卒業の記念メダルがはげかり
ないよりは増したと思ふ記念品
何時さなく記念貯金に遠ざかり
記念品何やら箱に入つたもの
十年の勞苦木盃たゞ一つ
記念日の今日小使の汗を見る
苦香瓏

退職の家に淋しい記念品
退職の記念寫眞へ瘦せて立ち
兒をだいて記念寫眞となつかしむ
(佳)記念品探せばほのまんま棚
(佳)鹿二匹記念寫眞へ景になり
(佳)感心をさせ記念品蓋をする
(佳)あの時の寫眞にこれが僕かな
(佳)お手植の松へ校長氣をつかい
(人)あの時の指輪が光る切れ話
(地)記念にさ茶店の娘も寫される
(天)優勝の記念汚れたユニホーム

策 題 棧 橋 夢 路 選

棧橋が見えて船員動きだした
棧橋で母シッケ糸フト見つけ
棧橋の隅に浮ばぬ許嫁
棧橋へ妻だけ寒う残つて居る
棧橋の荷物曲馬とうなづかれ
棧橋へ片荷となつて船が着き
ブラジルに行く棧橋へ風強し
(佳)棧橋の雨にまみれたバスケット
(佳)棧橋の背延び上る船が着き
(佳)棧橋をたしかな足でふむ歸朝
(佳)棧橋へ涼みがてらに送られる
(佳)氣晴しの旅棧橋へ急いで居る
(人)棧橋の日本の雨に少しぬれ
(地)棧橋に紙一筋の義理を投げ
(天)棧橋に何日か別れた海の色
(軸)棧橋へ一人残つてあやしまれ

二 水

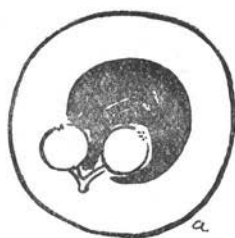
斧 葉 無 折 破 文 小 陽 萬 雙
路 竹 草 久 宰 喜 樂 光
夢 破 無 綠 秀 悟 雨 壽 破 孤 柳 文 木 虛 折 雨 雙
路 竹 樂 朗 聲 空 町 郎 竹 舟 堂 久 白 三 草 町 光

策 題 親 切 壽 耶 選

梅田驛さて親切にのせられる
親切にモ一度いへば返事なし
親切と云はれる人に金があり
引つ越して来たお隣へ水を汲み
鐵置いて門まで運れて来てくれる
親切へ無言くが續いて居る
泌みくゝ知る親切に癒えて行き
親切が身にしむ頃は見はなされ
親切にされて話題の盡ぬなり
親切の後に残るお様の借り
先生の親切こそばゆく歸り
突きつめて見れば親切金の事
親切な傘が重たい通り雲
親切にうつかり乗らぬ金があり
親切な女將にされて老けて行き
親切へ氣づくのまゝの流行妓
親切へ逆ひ乍ら足袋をはき
親切な男にされて損をする
(佳)親切な娘であつて嫁さおくれ
佳親切にされて下宿へ義理が出来
(佳)行き倒れ今親切に魅り
(佳)悪者の親切荷物持ちたがり
(佳)斷つてよいが社長の御親切
(人)荷車の樂方ですと初便り
(地)親切な親方ですと初便り
(天)親切を認めて呉れぬい娘
(軸)親切を仕盡して見る片思ひ

壽 耶 選

壽 夢 蟬 二 文 雙 斧 破 雙 綠 折 琴 萬 小 夢 白 文 無 吉 桃 菩 陽 木 二 蟬 壽
郎 路 古 空 水 久 光 葉 竹 十五夜 朗 光 草 月 樂 宰 路 鶴 久 樂 朗 仙 香瓏 喜亭 三 水 古



杭 全 町 MEMO 二 柳 子

▲作句によい頃になつたので、皆様も一層句作に精進されることであらうと思ひます。

▲番傘川柳社の主催で八月廿日夜本社賛助員岡本一平氏の歓迎川柳會を催され一平先生より番傘川柳社にまつて有益な講演をされ、歸京されました。本社からはひろし、山雨樓、楢雨、文蝶の諸氏と私が拜聴致しました。

▲本社客員篠原春雨氏の宅では八月廿七日男の子(初孫)をもうけたさうですが、産後の経過が良くないさうです。一日も早く全快されんことを祈ります。尙右の如き状態にもかかわらず本誌の募集吟「稻妻」の選句に遅延なくお送り下さつたことを投句者と共に感謝致して居ります。

▲本社に使用してある原稿紙並びに句箋は同人松盛琴人氏の寄贈にかゝるもので感謝の外ありません。

▲同人淺井冷々子氏は家事の都合上當分松山支部幹事を同人岩本素人氏と交替されることになりました。

▲同人庄萬よし氏は八月廿日夜行で富士五湖巡りに行かれ廿五日に歸阪されました。

▲同人太田朝陽氏は南海鐵道の本社誌として勤務されることになりました。

▲同人庄萬よし氏は舊居の改築が出来たので九月十一日に移轉され今後道頓堀支部の句會を時々催すのことです。

▲新進川柳家阿部閑生、増位汀柳の二氏が新に社友として入社された。増位氏は酒の新聞社を興され創刊號を九月に出されました。

▲田中彰秋氏は八月廿日大和の岡寺から便りを寄せられました。

▲九月五日の午後から私一人で大和當麻寺へ出掛けて來ました。

▲「近作柳樺」及「課題吟」の投句用原稿紙が出来ました。當分の内本誌投句家に限り贈呈いたしますから、紙錢切手封入の上至急申込んで下さい。

▲本誌の編輯は事務所で路郎主幹琴人、ひろし、双葉子、雨町の諸氏と私とで致しました。すつかり秋になつたので編輯もすらくと運びました。

移 轉

▲岩崎柳路氏は岐阜市西端町七武林商會へ

▲山下成和氏は京城府南山町二丁目三五へ

▲松並光哉氏は吳市八幡通一丁目四〇へ

▲森田一二氏は名古屋市東區千種町元古井一六三へ各轉居

新誌友(四年九月十五日まで)

「川柳雜誌」前金半年分壹圓八拾錢以上拂込みの讀者を誌友として、こゝに芳名を掲載します。何卒此際新讀者を御勧誘下さる様にお願ひ申します。御紹介下さる方には「川柳雜誌」の近刊を見本として差上げますから御申込下さい(二冊迄)

山本、岩原、筒井(山下佳水)中川知一、藤田道太郎(長崎柳秀)川上三太郎(麻生路郎)鳥居長太郎(若井たけし)丸山公二(松本助六)前野精一(安井ひろし)檜皮九一(友淵貴山)蛭子ます(蛭子省二)河野雨桂(淺井冷々子)幸松四五(松盛琴人)畑田炭車、山口鐵二、杉岡幸泉、須山龜一、牧田普門、辻清好、山本靜香、高岡道夫、津邪瓢々樓、土肥好次、藤井蛟郎(本社事務所)括弧内は紹介者



編輯 後記

▼秋が来た。句の秋が来た。思案の秋が来た。川柳詩人よ。大きく呼吸せよ。

▼藤椅子が眼に冷めなくなつて来た。風の音さへハツキリと聞くことが出来る。そろ／＼と酒の味がうまくなつて来る。い、句が出来るやうな気がして来た。ふんばれ。

▼本號も原稿は相變らず賑やかである。殆んど特輯號に近い原稿が貰つた。川上三太郎氏は「錯覺外道」に氏の才人ぶりを鮮かに見せ、前田雀郎氏の「蟋蟀入牀語」は雀郎氏畑の快文字、蛭子吉二氏は例によつて氏のうまさる研究の發表で、何れも本號の好讀物たるを失はない。諸家のビルディングはさり／＼に面白く讀まれる。こゝばかりは氣樂に筆がとれるだけに、何れも脂がのつて来たらしい。お蔭で私の原稿などは部屋の外へ押し出されてしまふ。

▼阿部閑生氏が「川柳漫談を讀む」を寄せてくれた。大變褒めてくれてゐる。お世辭にしても嬉れしうが、さうさつては罰があたりう。有難う。講談社ほど廣告したら、押切帳そのけで賣れるだらうと讃辭を惜しまなかつた人さへあるが、これは出版社の方へ云ふて貰はればどうにもならない。

▼九月五日に東京の川上三太郎氏が「さやり」の塚越迷亭氏を伴つて來社した。夕刻、放送のため一旦歸つて行つたが放送が済むと三太郎氏だけ又戻つて來た明治時代からの交友だけに小妻と私との三人で、初秋の夜をちびり／＼とのみながら話しつゞけた。松江から橋立へ廻つて來た話、東北へ出かけた時の話、極月に藝人が内縁の妻と萬世橋のレストランの隅で子どもの寫真に酒をそなへてゐた話など、それからそれへ話した盡きなかつた。三太郎氏は翌朝の特急で歸つて行つた。

▼七日の夜。端の坊で柳珍堂忌句會を開いた。二十一日には柳翁忌句會を開いた。柳珍堂が亡

くなつたのは大正八年九月十四日で柳翁は九月二十三日であるが何れも社の都合で少しく日を早めて句筵を開催した。柳珍堂忌も雨、柳翁忌も雨、一層しみじみさせられた。柳珍堂忌の夜の題に「尼」といふのがあつた。端の坊が尼寺であることを知らない琴人君が大きな聲で「尼の句を頂きます」とくり返へすので私が「おい／＼、は尼寺やで」に注意したらみんなが笑ひ出した。自然の滑稽か。

柳翁忌には山雨樓氏が「川柳を誇る」滞阪中の若蛙氏が「川柳忌のこゝ」私が「柳翁と秋の夜」と題して、柳翁思らしい一夜を過ごした。當夜京都からは紫明氏、畫家では伊藤彦造氏が出席して作句に親しんでゐた。

▼十一日の夜、ひろし居て月評會を開いた。評者は揃つたが筆記者が差支て誰一人來ない。止むなく欣女を煩はすことになつたが、ひろし君の批評になると箸のこけたこゝでも笑ひ出す。

「てか／＼と」さいふ句で、その「てか／＼と」がなかいと云うては笑ふ。紋太氏の頭が欣女の

七〇

鼻の先にあつたので、をかしがつたのかと思つたひろし君がふき出す。ひろし君が戀の句がさうださか云ひ出すと又欣女が笑ひ出す。いや筆記の抄らないこと影しい。その字はさう書きまです。さ欣女の筆が止まる。「カナで書いてエ、ヤないか」とひろし君が應答する。うれしさうに若い二人がいちやつきながらの筆記でとう／＼十二時近くになつてしまつた。それから紋太氏は神戸へ、山雨樓氏は河内の八尾へ、私は南海線岸の里へ歸へるのである。月評會もなか／＼樂ではない。

▼脚本製造業者を以て任じてゐる食満南北氏から戯曲徳川慶喜の寄贈をうけた。こればかりは商賣氣をはなれて書いたもので、松竹の御大も首を振つた、さうして出版してくれる本屋もないので、南北さう血迷つたか自費出版をしたさ迷迷めいたことが冒頭に書いてある。賣る脚本ばかり書いてゐる作者が賣れぬ脚本を書く心境は實に尊いさ云はねばならぬ。購讀された。定價五拾錢。御注文は河内惠我の莊の食満南北氏へ。(路郎生)

投稿規定

▼近作柳樽及課
題吟の句稿は

葉書又は同型
の厚紙に各題

別紙に認め、
住所氏名を明

記すること。

▼各地會報は半
紙判の原稿紙

に清記のこと。

▼書體はなるべ
く楷書「川柳

雜誌原稿」を
封筒に未記す

ること。

▼締切に嚴守さ
れたし。

▼投稿其他につ
き御問合せは

すべて返信料封
入のこと。

募 集

第六卷第十二號課題

十月五日締切
(各題十句以内)

▼就 職 岩 本 素 人 選

▼外 人 佐 々 木 三 福 選

▼釘 中 川 眼 隠 子 共 選

友 淵 貴 山 共 選

第七卷第一號課題

十一月五日締切
(各題十句以内)

▼元 旦 森 東 魚 選

▼海 老 麻 生 葎 乃 選

▼指 中 澤 濁 水 共 選

中 見 光 路 共 選

毎 號 募 集

▼近作柳樽(拾句迄) 麻生路郎選

▼各地柳壇(會報)

▼文章(評論研究感想吟行漫文)

▼社 告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀

廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務

所宛に願ひます

價 定

普通	一部	金參拾錢
新春	一部	金五拾錢
八月	一部	金四拾錢
特輯	共	壹圓八拾錢
半箇	共	壹圓六拾錢
前金	共	壹圓六拾錢
壹箇	共	壹圓六拾錢

料 告 廣

本誌への廣告に就き
ましては本社へ直接
御一報下さいますれ
ば御相談に應じます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確
實であります▼請代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙
に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金
郵便を差立てますが御不在中でも預ける様に願ひます、但集金郵便
(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には
何月號よりと御指承願ひます▼轉居又は改名等の節は舊併記して
御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和四年九月廿五日印刷

昭和四年十月一日發行

第六卷第十號
(毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 大阪府西成區千本通五丁目七番地 麻生 幸 二 郎

發行所 大阪府西成區千本通五丁目七番地 柳 幸 二 郎

振替大阪三一五一四番

川 柳 雜 誌 社 事 務 所

大阪府住吉區杭全町六〇三番地

振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一一六七番

店 書 捌 賣

(大阪) 大賣捌 サクラヤ書房。(明文堂 其他市内各書店)
(東京) 仲見世 玉 森 堂(神戶) 米田、後藤、實文館(函館)
石 榑(石川縣小松) マコト屋 (京都) 三宅 (松山) 弘文舎

(順はろい)

十一

清 酒

午後六時 白鶴が待ち妻が待ち

白鶴をチントンシャンと提げて来る



灘 津 攝

嘉納合名社會釀

古本屋時代

今のやうにあさから／＼新刊が出るゝ新刊を一々讀破することは容易ではない。たとへ新本を買つてもいよく讀むころになれば、もう古本で至極新しい本が出てゐる。こうなればわざ／＼新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新しい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に

公立社の棚

には斯うした新しい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にまつては、誠にありがたい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾冊か求めるうちには幾冊かをロハで讀める利益があらうと思ふ。

(路郎生)

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

▲日本橋

を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました。從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南 五 六 二 番

漫画八家撰

緊縮政策なんて世間は益々世智辛くなる。國を舉つて苦虫を喰潰してはッレこそ世間が眞暗だ。伸びゆく前途に最も必要なのは明るく軽い氣持である。忍苦世界の救世として現れ出でたる「漫畫八家撰」その一冊でも覗いて見玉へ「あゝこれかこれで苦勞が和らげる」老いも若きも男も女も手を拍つて歡迎するこゝに受合なり。

- | | | |
|-----|--------|-------|
| 第一篇 | 女性美建立 | 田中比左良 |
| 第二篇 | 退屈世界 | 和田邦坊 |
| 第三篇 | ふし穴から | 細木原青起 |
| 第四篇 | ユーモア錠劑 | 尖戸左行 |
| 第五篇 | 尖端を行く | 河盛久夫 |
| 第六篇 | 裸の世相と女 | 下川凹天 |

締切十月十五日

大懸賞

全六冊にわたつて最も興味深き懸賞を發表します。一等肉筆掛軸以下各等多数の珍品を提供します。

御申込は最寄書店へ

(申込金不要)

會費 毎月拂 一冊 一圓二十錢

送料

全額拂 六冊 六圓九十錢
本社直接の場合、東京市内六錢、地方十二錢、滿鮮臺灣十四錢、各一冊に付き以上の送料を申受けます。
書店にても幾分の送料を申受けることもあります。

社術美央中

町崎長外市京東
二八六七四京東替振

所行發

川柳詩壇
の巨人

麻生路郎氏著

吉岡鳥平氏挿繪
柴谷柴舟氏挿繪

最新刊

川柳漫談

四六版・三九一頁
美裝・函入
挿繪六十葉
定價 金壹圓五拾錢
送料 金拾貳錢

著者は至つて眞面目な人、

而もその語るどころ飄逸に

辛辣に眞にユーモアの神髓

を掴む。空前の快著！

本書の扉に著者のサイン御希望の方は「川柳雜談社」の方へ
直接御注文を願ひます

本書の内容

川柳漫談

臍の緒、盲人の徽章、蛙、夫婦喧嘩の解剖
都會地獄、君も僕も死ぬ話、レディーメイドの書置、戀を
追ふ一人者、指切、鼠、盜人、女の三十、賽銭、重役、フア
ブルの糞の外交、幽霊の靴、近眼の微苦笑、傘の行衛、猫
の寫眞、愛の巢、保険屋と新聞屋、贅趣味、床下の佛像、
無口、附貸の犬、鼻の修業、なりさがり魂、校長さん煙
草、私の墓

川柳染ちがひ

一ト昔前的大阪見物

發行所

東京市下谷區御徒士町二丁目一
番九
振替東京七二二三三番
大阪市東區備後町一丁目三番
振替大阪一一一三六〇番

弘文社

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一圓一日發行）
昭和四年九月二十五日印刷部未 昭和四年十月一日發行

川柳雜談

（第六十九號）

定價 三拾錢